

79  
631

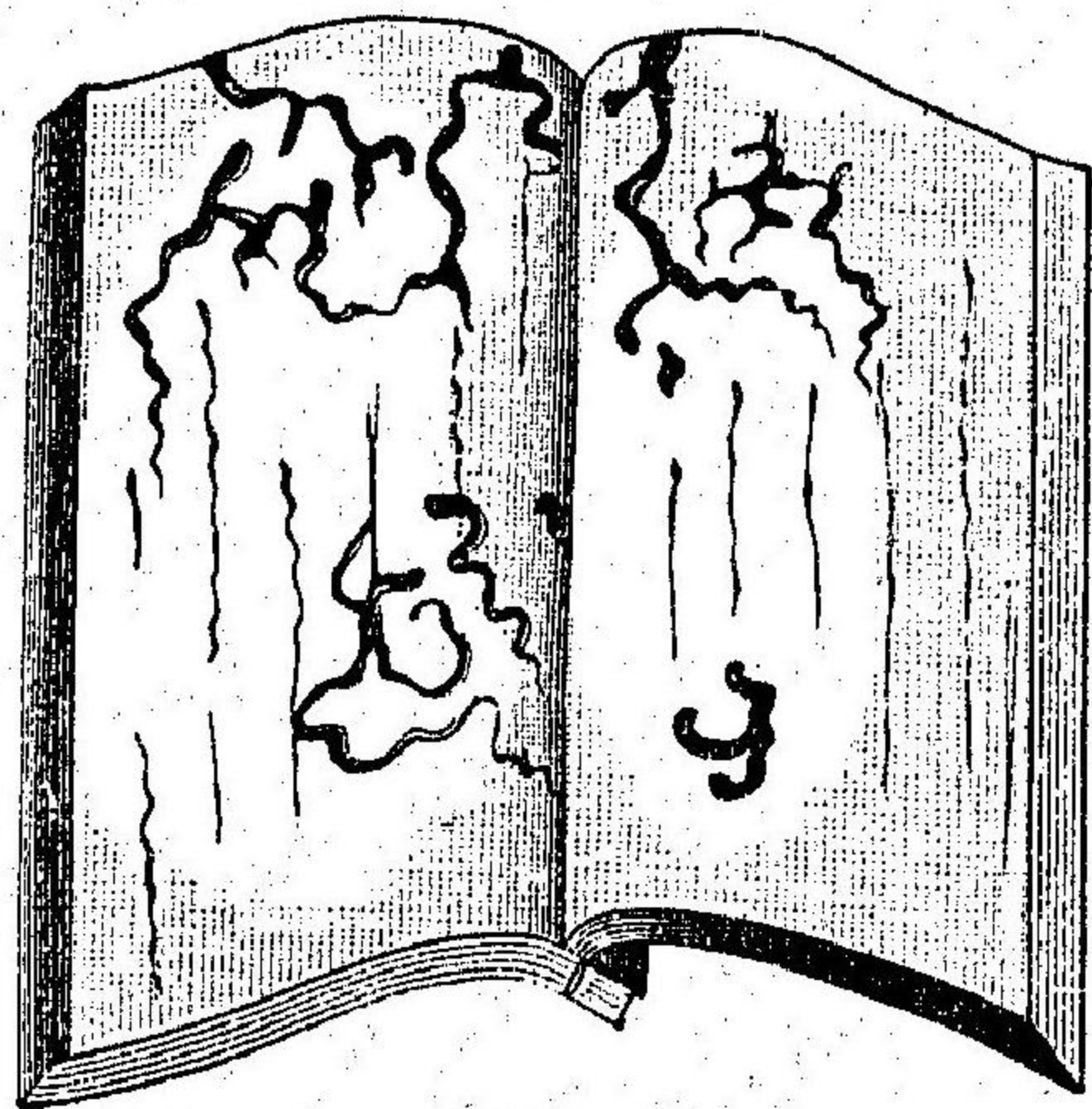
理學博士佐々木忠次郎著

屋内の動物 全

東京 成美堂發行

79-637

# 屋內動物



明治  
28 11 14  
東京 交

成美堂發行



緒言

緒

余は曩に人體の害蟲と云へる一小冊を著して世に公にし吾人衛生の一助たらしめんことを望み且つ吾人に有害なる蟲類は如何なる形のものにて如何なる習性のものであるや其大略を示さんとて物したるに外ないのである然るに屋内を調べ見ると有害無害の動物が幾種もある吾人は之を知らないと云ふことは甚だ残念であるのみならず之を調ぶることは有益で面白ひことである特に閑散の時などはには屋内に居ながら之を調ぶるならば退屈と云ふことを忘れて而かも智識を増すことが意外に多いことである加之何れの土地にても屋内には必ず幾種かの動物は棲ん

言

緒言

で居るに極つて居る故に何れの場所にてても之を調ぶるとは容易である著者は從來取調べたる屋内の動物二十餘種の形状習性或は驅除法などを纏めて一小冊となし屋内の動物と名づけたり若し此冊子は幸ひにも屋内に住みながら如何なる動物が屋内に吾人と同居して居るや否やを知らざる者の参考に供へることができたならば著者の満足之に如くものはないのである

二

明治三十八年十月二十三日凱旋觀艦式の日

理學博士 佐々木忠次郎誌

屋内の動物

目次

第一	衣魚	一
第二	ちやたてむし	五
第三	蠶蟻	一一
第四	黒大蠶蟻	二八
第五	かつをむし	三〇
第六	箆筒むし	四二
第七	書物蟲	四七
第八	小豆蟲	五二
第九	蛾蠅	五四
第十	白蟻	五七

目次

一

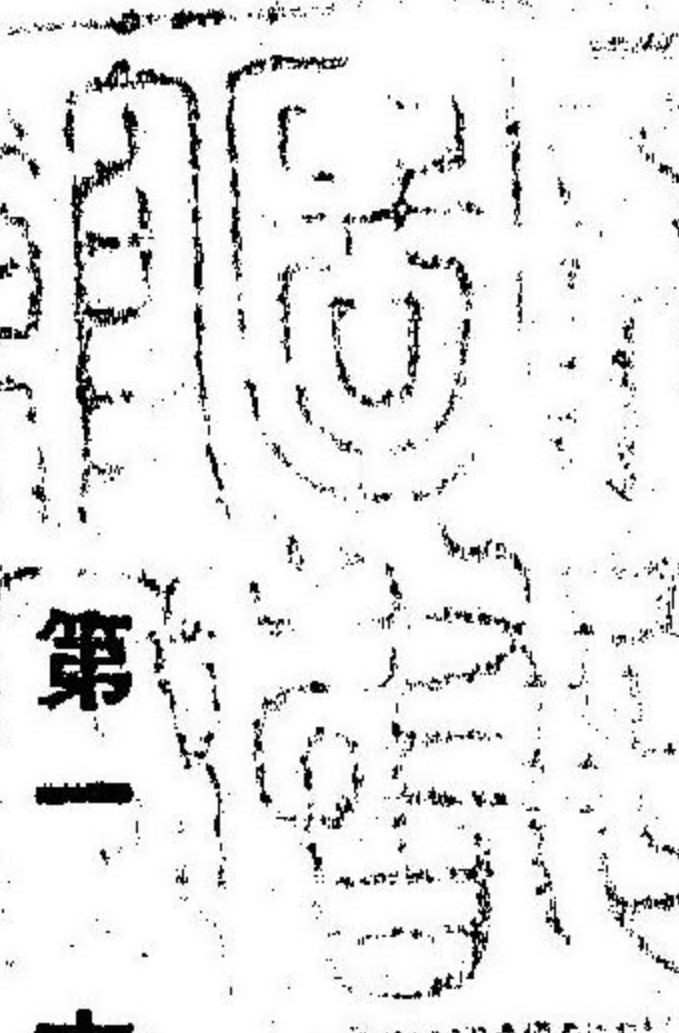
第十一	蟻	六五
第十二	衣蛾	七三
第十三	黒はだかむし	八〇
第十四	壁錢	八三
第十五	家蜘蛛	八五
第十六	あとひざり	八九
第十七	をめむし	九一
第十八	蜈蚣	九三
第十九	蚰蜒	九六
第二十	守宮	九九
第廿一	家鼠	一〇五

目 次 終

屋 内 の 動 物

理學博士 佐々木忠次郎著

衣



第一 衣魚 (第一圖)

魚

衣魚は誰れでも知つてゐる通り日本紙の書物類に蟲害を及ぼすものであつて洋書類には殆ど蟲害を及ぼさないと云つてもよい此蟲は扁くして長く體の全面にはきら／＼と光澤のある鱗の如きものが重なり合つてある若し衣魚を指頭にて壓ゆる時はきら／＼したる塵の如きものが指頭に付くものである是れが右の鱗である此鱗は魚類の鱗と

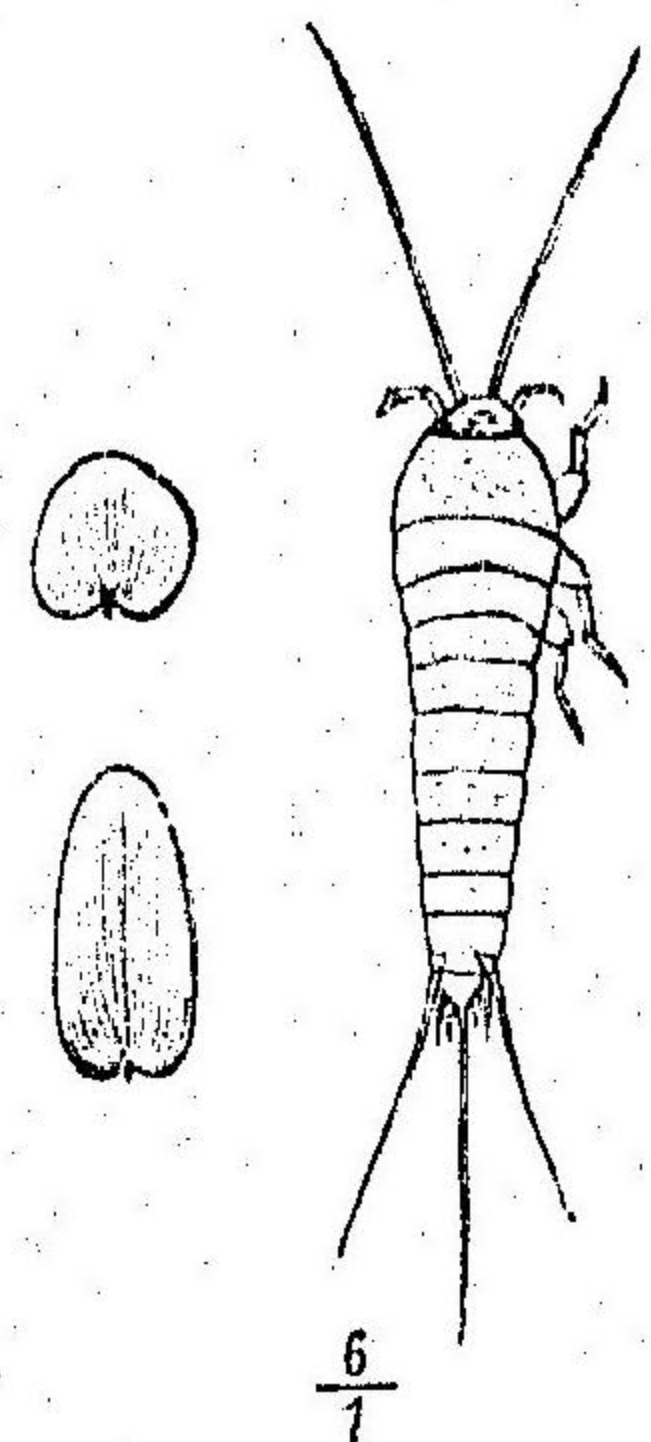
は全く異なりたるものであつて普通の毛が變狀したるものであるだから之を鱗毛うろこげと稱へてをる鱗毛には圓きものもあり楕圓・長楕圓のものがあつて其形は一定してをらぬが何れの鱗毛にても其一方も少く凹みて凹みの中ちに極めて短かな莖を出してをる此莖を體皮に箝め込み魚鱗の如くにならんでをる尙ほ鱗毛の面には細き線が縦たてに密にならんでをり實に奇麗であるが惜おぼいことには其莖や線は細かいから肉眼にては見る事が出來ない顯微鏡にて初めて見ることができるものだ衣魚の頭を見ると二つの眼があつて二本の細長い毛の如き鬚を生じてをり脚は六本あつて其根元は著しく太くて平たい之にも矢張鱗毛を生じてをるがゆへ矢張きらく光つてある脚は短ひけれど

も中々達者で走行することが上手であるから容易に捕へることができぬ尾端を見ると之には三本の長き粗毛がはへてある先づ衣魚の體の模様は右の如くである是れより其慣習に就きて話をふ

衣魚は古本や反古などの中ちに棲むものにて之を食するものであるから紙に蟲孔が開き或は表紙厚紙の如きものであるならば紙面は紙かみられてはげの如きものができ本箱を掃除したり書物の蟲干しをしたり反古類を廣げる時は大抵多少の衣魚が這へ出づるが常であるけれども暗きを好みて明あかいのを嫌ふものであるから直ぐと逃げ走りて紙の間だの箱の隅すみだの隙目や裂目の中ちに匿れる右の様などころに匿れるには衣魚の體が平たいから極めて便

利である

第一圖 しみ及其鱗毛(原圖)



衣魚を豫防驅除するには第一に書物・反古の類は新古に係らず蟲干しをするのが肝要だ又本箱其他反古を入れ置きたる箱の類も天日に曝せ

ば衣魚は皆逃げ去るか又は斃るゝものである

本箱や反古箱の蟲干をしたる後ち再び之を入れるゝ時は樟腦を紙に包みて入るゝが宜しい尤も時がたゝば樟腦の臭ひが失せるものであるから臭の失せたる頃には更に新しき樟腦を入るゝがよいしかし樟腦の臭ひが稍や薄らぎたる時は復た害蟲が多少侵し初むることが少

くない樟腦の代りに「ナフサリン」と云ふ藥を紙に包み本箱・反古箱等に入るゝも蟲害を避けることができる此「ナフサリン」と云へる藥は白色の小片で一種の強ひ臭ひがある此臭が樟腦より一層害蟲を避くる効能がある然し「ナフサリン」の臭は樟腦よりは少しくあししいから其心地して使用せねばならぬ

第二 茶たて蟲(第二圖)

此蟲は軟かな小さな蟲であるが體の丈ケは八厘位で幅は廣く特に頭は大形で幅が廣ひ其左右には大きな眼があつて二本の著しく細長ひ鬚を生じて居り此鬚には數多の細き毛が生じてある體の色は薄ひ灰褐であるけれども腹に

は數條の褐色の帯形の模様は横走してある翅は透明無色にして薄く大形にして其長々は體より長い休んで居る時は翅を背上に屋根形に横へるが常で脚は細長くよく走るものである「幼蟲は其形は親蟲と大抵同じことであるが只だ違つて居るところは體の大きいのと翅はあつても不完全にて全く飛ぶことができないことである

ちあたてむしは大抵六七月の頃現れ出づるものにて薄暗い部屋だの書院だの納戸などの障子や又は夏日炎熱なるがゆへ障子を外<sup>は</sup>ずして幾枚も重ね立て掛けて置くところ又は寺院や神社の古障子にも往々棲めるものにて餘り掃除をしない障子には特に多く棲むものである今や薄暗い所にて人の餘り往來せぬ極めて靜かなる部屋書院納戸な

どに入り込み耳をそばたて待つて居る時は微かに「ちやつ々々」或は「ぼつくと云ふやふな細い音が引續きて聞こへ或は一時停まりて復た聞へ或は遠く聞へたり或は近く聞へ此音を聞く時は何となく心細く淋しい氣分になる故に陽氣な蟲ではなくて陰氣な蟲だ然し考へごとなどをする時は此の音を聞くも別に妨ぐるといふやふなことなどはなくて考へ事を援けることもある「右の如くちやたてむしの發音は遠く聞へたり近く聞へたり或は途切れるものであるから發音を慕つて蟲のありかを見出すことが六ヶしい然し蟲が發音する場所に近づいたら極めて靜かに障子に近寄り其紙面を注意して見て居らば遂には此蟲を見ることができるさてちあたてむしは障子の紙に止まりて彼

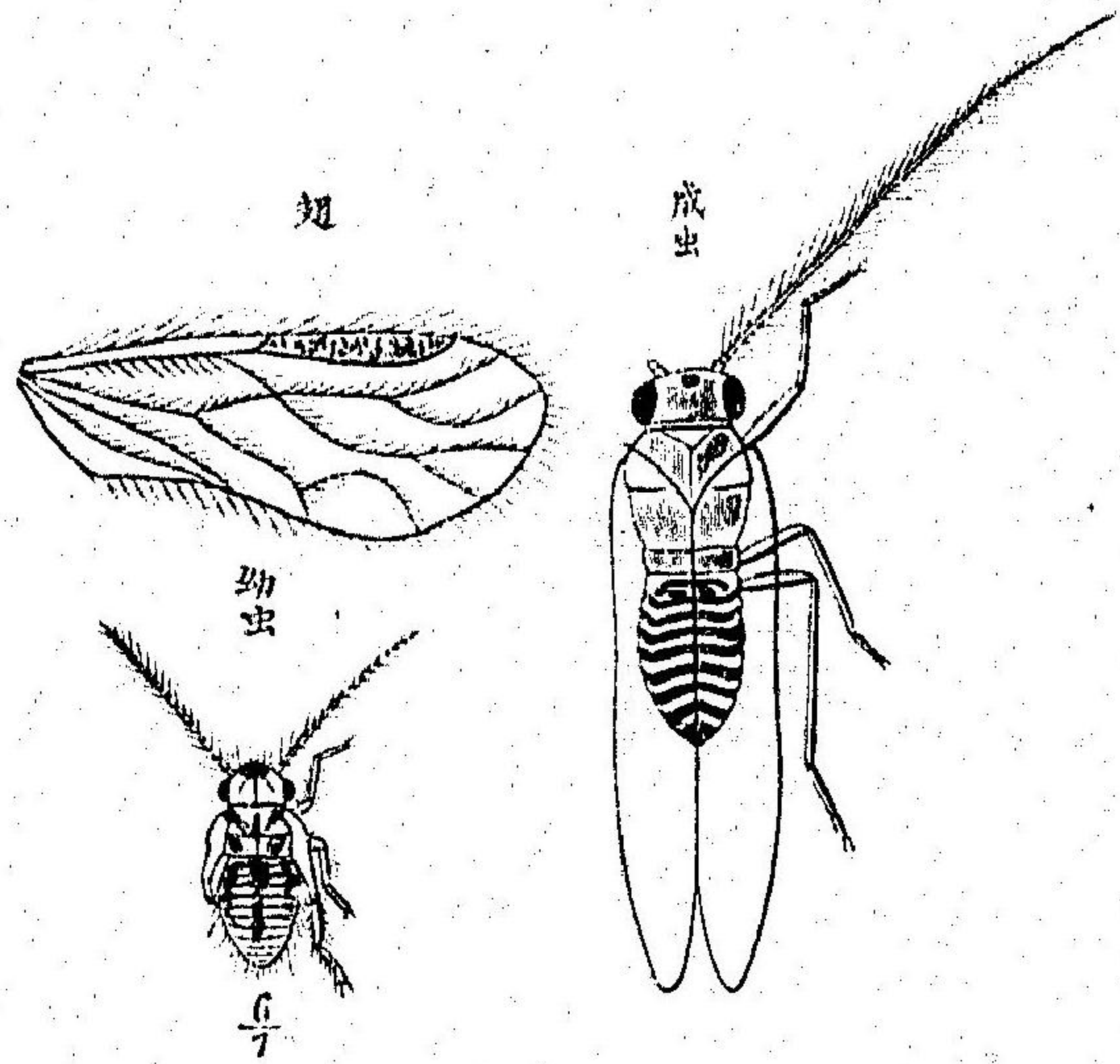


屋内の動物

地此地をはひ廻り時々止まる其止まりたる時には發音をする如何にして發音するものであるかを見るにすすむしやまつむしの如く翅にて發音するのではなく又せみひぐらしの如く腹の鳴器にて發音するのでもなくて口にて發音するのである然し口で發音すると云つて鳥獸が聲を發するのとは全く違つて居るそこでちあたてむしが發音するのを篤と調べて見ると口に生じてある齒にて障子紙の織緯を咬み上げては放ち咬み上げては放ち幾回となく續けるが故に「ちやつく」「ぼつく」と云ふが如き音が聞ゆるのであつて大抵一分時間に「ちやつく」「ぼつく」と云ふ音が少くとも六十回以上も聞ゆる

茶たての蟲

第二圖 ちあたてむし(原圖)



塵埃などを食するやふに見ゆる又別に障子紙を破るが如きいたづらもなさず外に是れこうと云ふ害はなさないやふに思へる然し此蟲の發音が聞ゆれば障子紙は久しく張替へないで古るびてをると云ふことが分り且つ障子に「ハタキ」を掛けないと云ふことも分るから多分此蟲は障子の張替へや掃除を

促して居るものらしい

第二 茶たての蟲

著者は此蟲の發音は可なり好きであるが尙ほ茶人や閑人などの中ちにも此發音を賞美して居る者もないではなからふ兎に角此ちあたてむしは鳥渡面白い蟲であつて淋しき時には陰鬱を慰める効能があると思へる是れ吾々より考へて見たる話で蟲にとつては此發音は中々大切なことであるそれは外ではない發音するのは雄蟲で發音をしたのは雌蟲である蓋し雄蟲が發音するのは雌蟲を呼ぶためであるから雄蟲は成る可く骨を折て爽やかな音を發することを雄蟲同士で競つて居る雌蟲は亦成るべく爽かなる音の方向に進み雄蟲に接するのであるだからして只だ無意味に發音するのではないことが分かる

發音にて雌を呼寄することは獨りちやたてむしのみでは

ない鳥類にも多く此例がある昆蟲類にも亦多く此例がある。即ち鶯の囀まづるも雌を呼のである蟬が鳴いたりこうろぎくつわむしかんたんきりぎりすまつむしすずむし等の發音するのも皆雌を呼ぶためなのであるから何れの蟲も一生懸命になつて發音するものだ此發音は夏の夜には涼しい様に聞へ面白いものであるから之を籠に飼つて置き其發音を聞く者が多い昆蟲の方では雌を呼ぶため精を出して發音するのを人が之を慰みとなすことが昆蟲に分つたならば怒ることが一通りであるまいが幸ひにして怒るやうな振りはないから仕合だ

第三 蜚 蠊 (第三圖)

蠶 蠶はごきかぶりあぶらむし又ちやばねあぶらむしなど  
と稱へ屋内に棲み食品を食ひ荒すものである右の如く蠶  
蠶はあぶらむしと呼べども野外の植物に多く棲る蠶  
とは全く異なつたる蟲である且蠶はありまきとも云ふ  
蠶は歐米各國を初とし支那日本等にては屋内に多く棲  
み晝は潛み夜は出であらゆる食品に群集し甚しく之を食  
食するものである

さて此あぶらむしは形ちが長楕圓で平たい着色は茶褐で  
あつて翅が四枚あつて背上に平らに横へるものである頭  
には二つの眼があつて細長き絲の如き鬚が二本ある脚は  
細長く丈夫にして能く走行する尙ほ脚には多く長き毛を  
生じて居る尾端にも二本の尾毛を出して居る蟲體には常

蠶

蠶

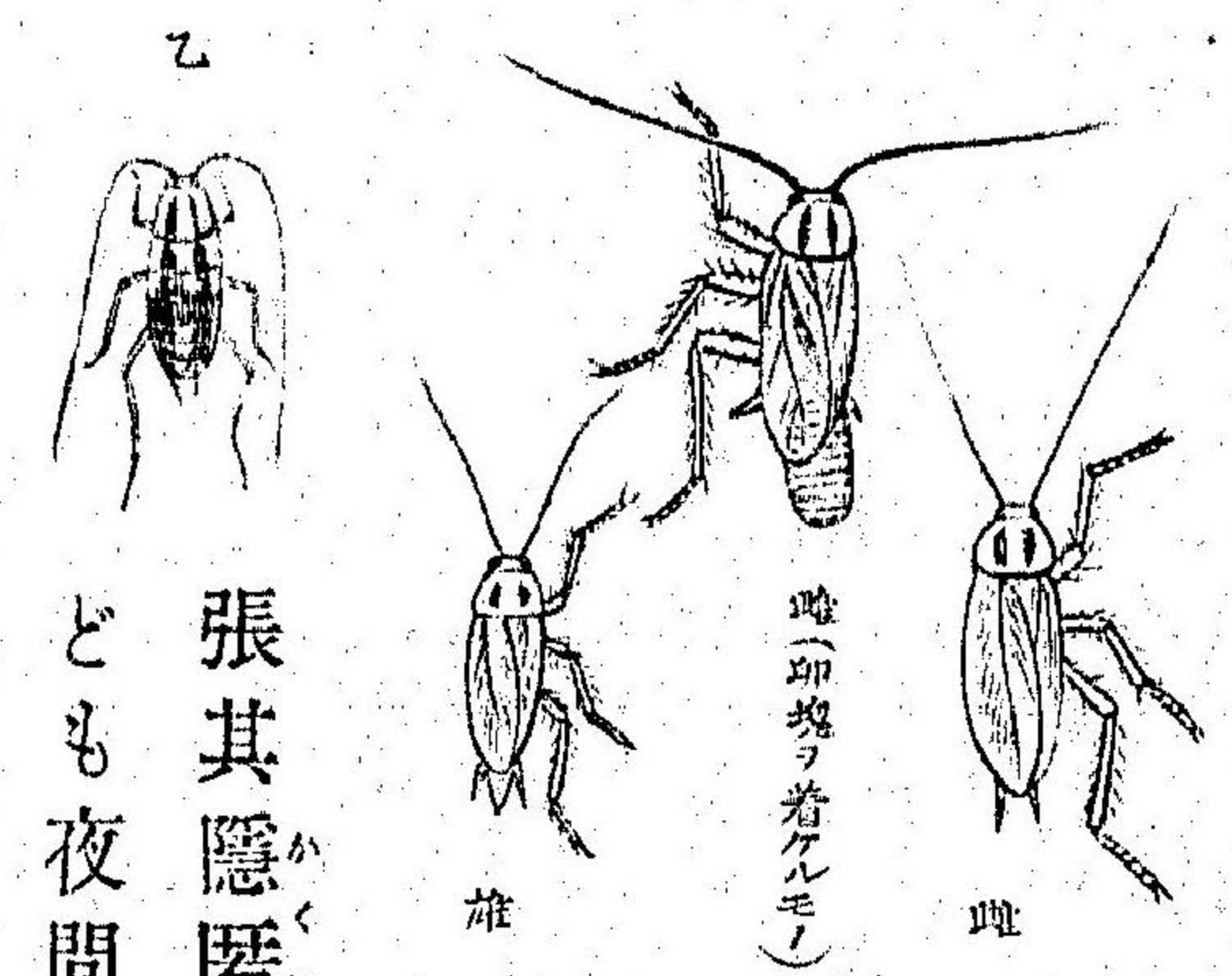
に一種の嗅氣がある

雌蟲は雄蟲より稍や大形で其長ケは五分餘あつて脚も尾  
毛も雄蟲よりは稍や長い雄蟲は長ケが四分許で脚も尾毛  
も雌蟲よりは稍や短い

蠶は常に走り歩き翅はあれども只だ近い間だを飛ぶ位  
で遠くも高くも飛ぶことはしない只だ走行を援くるがた  
め翅を使用する位なものである此蟲は多くぞろ／＼と走  
行するものであつて之と共に夥多の幼蟲蠶の子を云ふ  
も走行するものである幼蟲の形は翅のある親蟲と同様で  
何も異つてをるところはないが體が小さいのと體の色が  
幾分か黒ずんである蕃殖期になると雌蟲は一疋にて大抵  
三四十顆の卵を産む此卵は皆くつ付き合つて丁度印籠形

の卵塊となりて黄褐の薄い膜にて包まれてある此卵塊は  
 牀に産み落すことはしないで常に尾端に着け歩行するも  
 のであるから腹部は大層長くなつたる様に見ゆる  
 さて是れより蠶蟻の習慣を話して見よ此蟲の好みて棲  
 める所は臺所や料理場であつて居間には棲まはないが若  
 しも其数が非常に殖多る時には随分居間にも入込みて  
 餌食を捜さんが爲め走り廻つて居る本邦などにては何れ  
 の所にてても多少蕃殖し居りて蕃殖の甚しき時は數百數千  
 の蠶蟻は群を爲して走り廻つて居るのが珍しくない特に  
 旅宿や料理店其他あらゆる飲食店には最も多く蕃殖して  
 居つて食品を食ひ荒すことが一通りではない然ながら此  
 蟲が食品を食ひ荒すは常に夜間であつて晝の中は戸棚と

第三圖 ちあはねあぶらむし (原圖)



か壁や柱などの隙間裂目などを初め  
 として炭取りの中ち鍋茶釜米櫃竈石  
 竈等の中ち或は其下に隠れ其他ある  
 とあらゆる薄暗き所に入りて匿る、  
 ものであつて人目に觸るゝことがな  
 いが若しも曇天とか雨天にて臺所や  
 料理場が薄暗い時には晝間にても矢  
 張其隱匿所より這ひ出で臺所荒しをす  
 けれども夜間の様に夥く這ひ出づるこ  
 とはない人が蠶蟻に近寄るとして決して驚か  
 ないのみならず平氣で食して居て逃げ  
 ない中々ずうぐいしい蟲である然し若  
 しも之を追ひ捲くるときは狼狽して老若  
 男女を問はず上を下

へと駆け出して隠匿所に逃込むのが常である其逃ぐる時には翅のなき幼蟲は只だ走るのみであるが翅のある雌雄は只だ走るのみならず時々翅を擴げて飛び歩行を援くるものである今もし此蟲を捕へ捻り潰すならば一種の悪しき臭が手に移りて心地がわるい  
さて夜分になると蠶は必ず其隠匿所よりぞく／＼と這ひ出で終夜食ひ荒して曉に至らば再び隠匿所に逃入り其形を匿すものである蠶は何に限らず食品でさへあれば直ぐに之に集まり食食するものであるから皿や椀類に食物の入りたるものあらば遠慮なく之に這ひ入りて食し其外貯藏の食物にも聚り飯櫃の中にも蓋の隙間より入込みて飯を食し特に砂糖は大の好物にて砂糖瓶などには入込

むことが多い只だ食品を食ひ荒すのみならばまだしものこと遠慮會釋もなく糞をするものであるから實に汚ららしいことは云ふまでもなく心地あしいことは限りがない随分此汚らしい蟲が多く蕃殖して居る臺所や料理場にて調理したる料理を舌打ちして食するものもあるが若しも此臺所や料理場を見たならば中々胸がわるくて食べられるものではない又此蟲が盛んに蕃殖したる場合には往々供へたる膳や食器に這ひ廻つてをるから心地があしくなりて食ふ氣がなくなる  
前にも云へる通り雌の蠶は尾端に卵塊を付着しながら駆け廻つて居るが卵が孵化して幼蟲が産れ出づる頃には卵塊は尾端より離れ落つるものである

屋内の動物

幼蟲の初めて産れ出でたる者は小形であつて親蟲と同様に走りあるきて食品に聚りて食することが甚しい其色は重も黒褐である其後成長するに従て六七回ばかりも體皮を脱ぎて有翅の蜚蠊となるのであつて時節の温暖なる時になつてのみ蕃殖し寒冷なる時節には蕃殖しない特に冬日には臺所や料理場に徘徊するものは殆どなく皆壁や戸板の隙間割れ目裂け目等に深く入込みて蟄伏してをり或は勝手の方に入込み箆筒や長持の中ちだの衣服の積み重ねたるところだの又は夜具蒲團の中までも潜み匿れ冬日を過ごすものもある

此害虫を驅除する方法は幾種もあるが効能のあるものは多くないが其重なるものを示さば左の如きものである

る

蜚

蠊

**第一法** 蜚蠊を驅除するには見當り次第に打殺すが宜いけれども多く蕃殖したる時は之を退治することは容易でない又一法には藪よもぎを細き竹だの木の枝尖きに纏着し之に害虫を糊着せしめて殺すも宜し

**第二法** 蜚蠊の嗜み食する食品を選び之に毒物を加へ驅除する方法あれども蜚蠊は性質伶俐なるものにて毒物を入れたる食品には聚まること極めて罕なれば此法にて蜚蠊を驅除することは六ヶ敷い

**第三法** 蜚蠊を蒸殺することは随分有効なるものなるも之を蒸殺せんと思ふ場所は密閉しなければならぬ之を密閉することが出来なければ蒸殺の効力が薄ひ

ものなれば薰殺せよふと思ふ時は密閉することが肝要である

薰殺するには二硫化炭素が宜しい此薬にて薰殺せんとする時は害虫の発生したる部屋を密閉し其牀の上に二硫化炭素を入れたる丈夫なる器物を置かば之より發散する毒氣は忽ち部屋の中ちに充ち害虫を斃すものである此二硫化炭素と云へる薬は透き通りたる無色の液にて一種の強ひ臭ひがある此臭が非常なる毒にて害虫は此臭を嗅けば斃るゝのである只だ此臭は害虫を斃すのみではなく吾々にも恐しい有毒なるものであるから二硫化炭素を取扱ふ時は成るべく臭を嗅がないやうにせねばならぬ且此薬は容易く火を

呼び爆發するの恐あるものなれば之を取扱ふ時には火を近けないやうにせねばならぬ其側にて煙草などをものまないやふにせねばならぬよく注意せねば測らざる患害に罹る恐がある  
除蟲菊の粉末(蚤とり粉の類)の薰烟は亦蜚蠊を斃すに有効なるものであつて吾々には殆ど無害と云つて宜い尤も此粉末にて害虫を薰殺せんには六時間以上も薰蒸せねば殺蟲の効力が薄い  
火薬の薰烟も亦驅蟲の効能がある其薰烟をこしらへやふと思ふ時は先づ火薬を撮り水にて少く之を濕ほしたるのち丈夫なる土器に入れ火を點じ之より發散する薰烟にて害虫の蕃殖せる部屋を薰蒸するのであ

る尤も火薬を入れたる土器は竈かまどなどの中ちに入れ置くことが安全である

さて右の薰烟にて害蟲の蕃殖せる部屋を薰蒸する時は害蟲は薰烟に堪へずして續々其潜伏所よりはひ出で次第々々に麻酔して遂には斃るゝものである其斃れたる者は盡く箒にて拾ひ集めて火に投げ入れ焼殺するが宜い

**第四法** 除蟲菊の粉末其他蚤とり粉の類は綜て蜚蠊を驅除するに有効である此等の粉末を用ゆるには蜚蠊の多く隠れ居るところを搜し其隠れ居る所に此粉末を振蒔きなるべく害蟲の體に付着せしむるやふになすことが肝要であるさて害蟲の潜伏して居る隙間裂

目割目等に振り掛け入るゝ時は害蟲は忽ち之より這ひ出で四方八方に散亂し暫くの間は狂ひ走るも次第々々に舉動は不活潑となりて走ることも歩るくことも出来なくなりて彼地此地をよろめき歩るきて遂には斃れ立たれぬやふになるその斃れたる害蟲はきびしく拾ひ蒐め火に投げ入れて殺すが宜いそうしなれば蘇生ひかる者が出来て來る恐がある

**第五法** 「チヨコレート」に硼砂を混ぜ之を蜚蠊に給せば能く食して中毒し多く斃れ死すると云ふ説がある此混成物をこしらへるには同じ量の「チヨコレート」と硼砂とを乳鉢の中に入れ乳捧にてなるべく細かにすり碎き其粉末を蜚蠊の往來する所に振り蒔き置かば蜚



蠶は之を食して斃れ死すると云ふことである其斃れ死するは「チヨコレート」に混じたる硼砂の中毒に罹る爲めである此方法は一の便利なる方法のやふに見受けらるゝも實地に之を試みるに蠶は中々伶俐なるものにて「チヨコレート」の中に硼砂の混じ入りたるを容易にさとり決して之を食することをしない若し食する時は只だ「チヨコレート」のみを選び食して硼砂は残して食せぬものなれば此混成物は蠶を驅除する効能は見へない

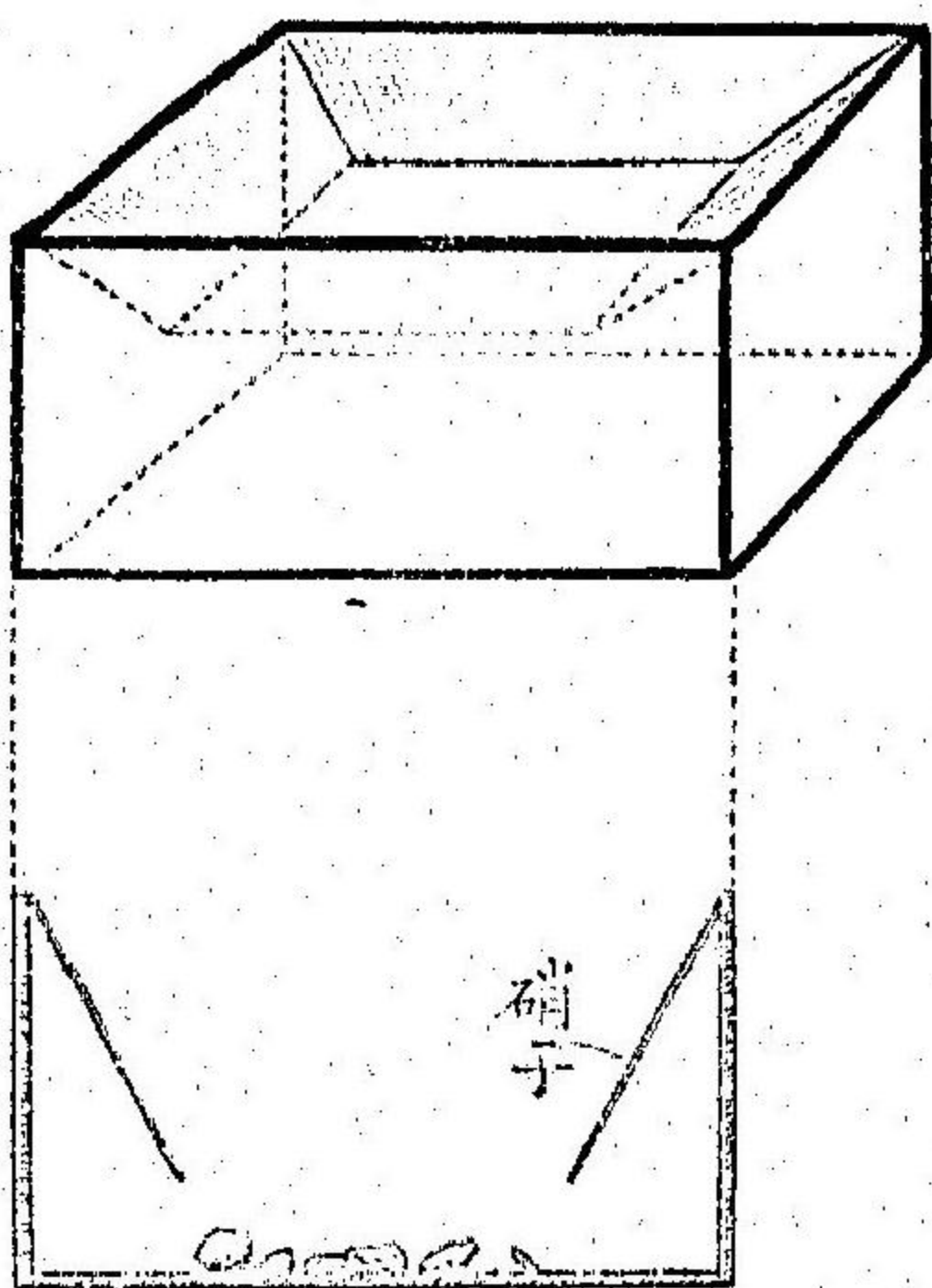
第六法

蠶を驅除するには「ナトシ」の類を用ゆることがある其重なるものは左の通りである

甲 一個の深底（かみ）の硝子箱である其口の四縁より斜め

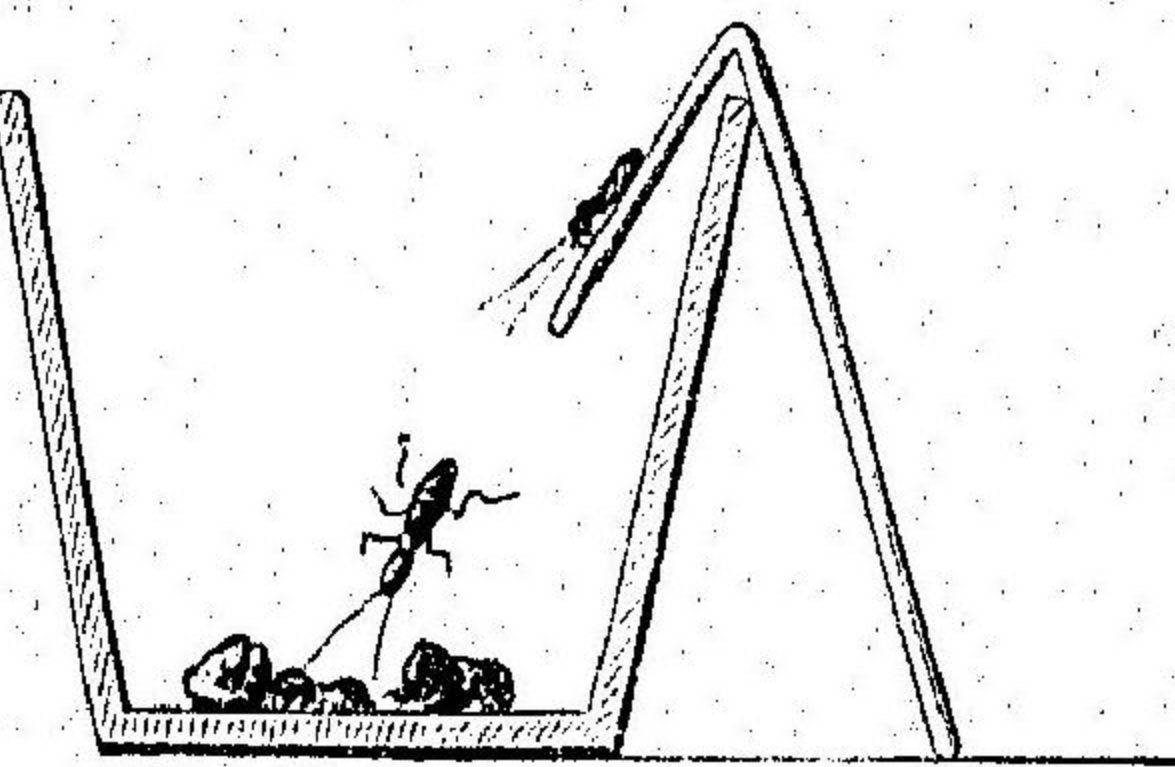
に箱底に向け硝子の板を横へ箱底には害蟲の好める餌（か）を容れ之を害蟲の往來する所に据へ置くのである

（第四圖）斯くなす時は害蟲は多く箱の口縁に這へ登り硝子板上に移つらば直ちにすべりて箱底に落ち餌を食して飽きたる時は箱より這ひ出でやふとするも硝子板に妨げられ逃れ出づることが出来なくて再び箱底に落ち後ちには多數の害蟲が箱底に溜つて來る此「ナトシ」を用ゆるは常に夜間に限る翌朝に至り同箱の「ナトシ」を調べ見る時は多數の蠶が箱底に集りて蠢（うご）きて居る此箱に熱湯を灌ぎ入れて害蟲を殺すのであるまた英國にて蠶を驅除するには深底（かみ）の甕（か）の類を撮り細長き板を二つ折になし其折れたるところを



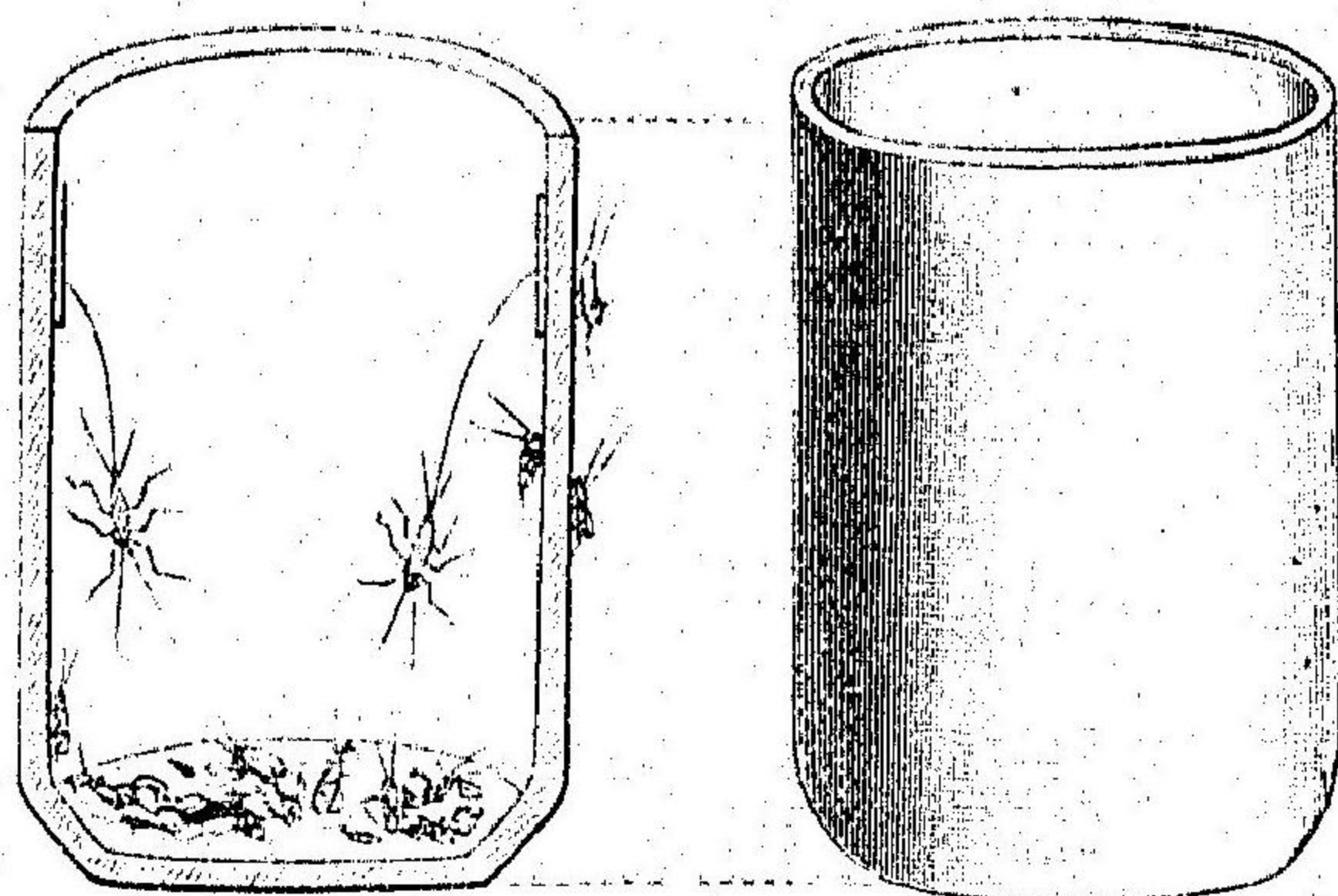
第四圖 硝子箱 (原圖)

甕壺などの口縁に掛け其一端を  
甕又は壺の内側に斜めに垂れ他  
端は其外側に斜めに横へ牀板に  
接し置き次で甕又は壺の中に少  
しばかりの腐 第五圖  
りかゝりたる 二つ折りの板を口  
縁に掛けたる臺  
麥酒を容れ置 (原圖)



第五圖 二つ折りの板を口縁に掛けたる臺 (原圖)

くのである左すれば蜚蠊は麥酒の  
香を慕ひ甕又は壺の傍に聚り其外  
側に横へたる木切れを傳へ登りて  
口縁に至り従て其内側に斜めに横  
りたる短き木切れまで傳へ降りて



第六圖

漬物甕及其内部 (原圖) 第五圖 此法にては夥く蜚蠊を驅除

遂に腐りたる麥酒の中ちに落ち再び這ひ出づること  
が出来なくて遂に麥酒の中ちにて溺れ死するのであ  
することができると云ふことである  
乙 は圓筒形の漬物甕を撮り其中ち  
に残飯だの其外甘味のある食品の残  
り物を容れ夜中蜚蠊の頻りに往來す  
る所に据へ置くのである斯くする時  
は蜚蠊は甕の外側に這ひ登り従つて  
其底に落ち食品を貪食する斯くて充  
分に食して飽きたる時は再び甕の内  
側に這ひ登りて逃げ行くものである

が若しも襖の内側は極めて滑かなる時は這ひ登らんとするもすべりて底に落ち逃げ出づることが出来ぬ左れども襖の内側は蜚蠊をすべらし落す程に滑かならざる時は襖の口に近き内側に環形に種油の類を塗るが宜い左すれば襖外に逃げんとする蜚蠊は油に脚をすべらし襖底に落つるが故に此所に蜚蠊は多く聚り蠢きて居る夜が明けたならば蠢きする蜚蠊に熱湯を灌ぎ掛け殺すが宜い(第六圖)

第四 黒大蜚蠊(第七圖)

黒大蜚蠊は普通の蜚蠊ちあばねあぶらむしより遙かに大形にて長は一吋一二分ある其形は長橢圓にて平たい體の

黒 大 蜚 蠊

色は黒褐にて滑澤がある頭は小さくして殆ど胸部の下に匿れ觸鬚は絲狀にして細長く體の長ケよりも長い翅は重ねて背上に平らに横へ脚は丈夫にして長く多く粗毛を生じて居り尾毛は太くして尖つてある

此蟲も矢張夜蟲であつて晝の中ちは暗き所を擇びて隠れてをるが故に目に觸るゝことがないが夜になると其隠匿

第六圖 ころきあぶらむし (原圖) 所より這ひ出で臺所や料理場などを



驅けずり廻り殘飯だの食物を搜して之を食するもので其害を加ふる有様はちあばねあぶらむしと略ぼ同じこ

とであるけれども其數は常に多くない田舎に旅をするると往々其蟲を見受くるものである其形は随分大きいゆへ驅

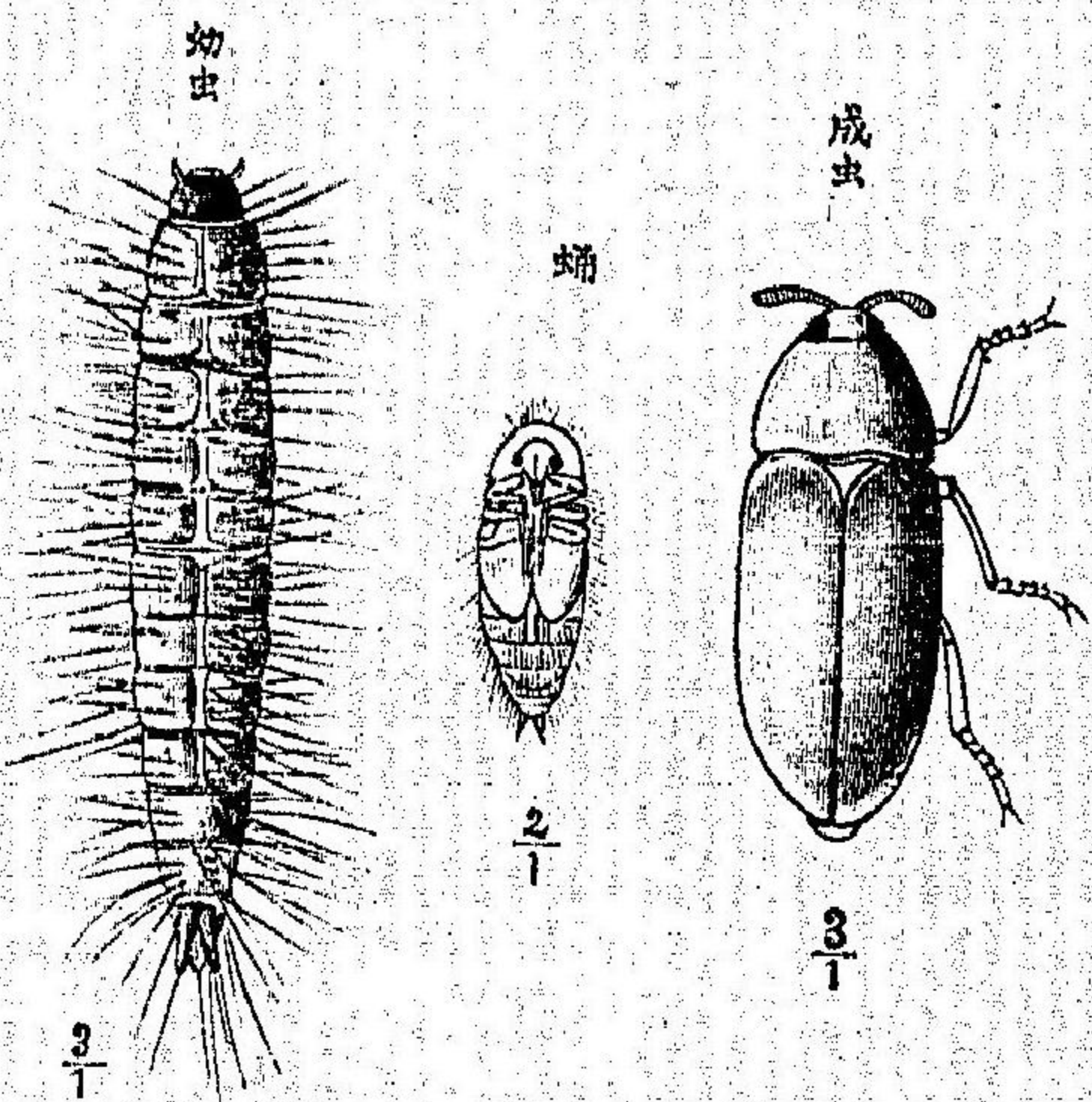
廻つて居るのを見れば餘り心地よいものではない此蟲は  
残飯を嗜み食するものであるからまゝくいむしとも云ふ  
故に何にも働かないで只だ飯を食ふのらくら者をまま  
くいむしと呼ぶところがある故に可成ままくいむしになら  
ぬやうに勤むるのは肝心だ  
驅除法此害蟲を驅除する方法はちあばねあぶらむしと  
同じにして宜ひ

第五 かつを蟲(第八圖)

かつをむしは甲蟲の一種にて羽蟲とも云ひかたあかはむ  
しとも云つて本邦到るところに見る事のできる害蟲であ  
る其形は平たな長楕圓で着色は黒褐にて長ケが三分五厘

許もあつて幅が一分五厘許もある頭は小さくして眼は黒  
く鬚は濃ひ褐色で其尖は少く太くなつてある體の一面に  
は小さな凹みたる點紋があつて短かな褐色の毛が厚く生  
じてある雌と雄との形には別に異つてをるところはなけ  
れども腹部の裏と陰具とは違つてをる即雌蟲の腹裏には  
二つの凹みがあるのみなるも雄蟲の腹裏にある二つの凹  
みの中ちには長き粗毛があつて丁度凹みに刺を生じたる  
やふに見ゆる又雌蟲の腹端には膜質の長き管があつて之  
より卵を産み出すの用を爲して居り雄蟲の腹端には細長  
き陰具を存してをる脚は丈夫にて驅けることが上手であ  
るがちよいと之に觸ると直に脚を縮めて死したるまね  
をなす又翅も達者で随分遠く飛ぶものである

かつをむしの幼蟲又は仔蟲とも云ふはがいたむしずみむし又すむしと云ひ長々五分餘ありて幅が一分許ある其形は平くして長く頭と尾との兩端は稍や細くなつてある體は十三個の節より成り皮が厚くて濃い褐色を帯びて居るが腹面の皮は稍や薄くて着色も亦薄い頭は體の割合には少くして殆ど三角形で少し許の長毛を生じてをり其側面には六個づつ圓形の單眼があつてなほ頭の前面には二本の短な鬚を生じてをる口部は丈夫で能く物を咬み食するに適つてをる體の前端を成したる三軀節には各々二本の脚を生じて居るが其他の節には脚がない尙ほ第十二番目の軀節の背面には二本の黒き棘を生じてをる此棘の根元は太くして互に接してある



幼蟲すみむしすむしがいたむし等の名があるは充分に成長してやがて蛹に化せんとする時は其長々は縮みて四分

第八圖 かつをむし蛹及幼蟲 (原圖)

餘となるも幅は却て一分四厘餘に廣り皮膚面に生じたる毛は多少脱け落ち皮膚は赭褐に變じ舉動は不活潑となり従て頭尾の兩端は縮み靜息して動かないが若しも手を之に觸るれば僅に徐々と動くものである此状態となりたる幼蟲は間もなく脱皮して蛹となり一週

間ばかりを過ぎて翅のあるかつほむしとなるのである

蠅は長く楕圓にして平く長ケは三分前後で幅が一分ある着色は薄黄にて頭は胸の裏面に横はるが故に背面よりは頭は見へない不完全なる翅や脚も亦腹面に横はる腹の背面には五個許の褐色の楕圓紋があつて腹端には二本の小刺がある

かつをむしは六月頃より現出で蠶繭を貯へる部屋だの或は鱈鮓の搾粕の如き動物肥料を貯へる納屋などに飛び入りて蠶繭や搾粕に卵を産付くるのである此卵より孵化し出でたる幼蟲即がいたむしは直ちに蠶繭を蝕ひ破りて繭内に入り蠶兒や蠶蛹を食し又たは鱈鮓の搾粕類を甚しく食するものであるさてかつをむしが蠶繭に害を及ぼす模様を見るに毎年六

屋 内 の 動 物

か つ を む し

月頃蠶繭を簇よりもぎ取り蠶籠の上に登ぼせ擴ぐる時に當て蠶繭の汚れたるものだの又はびしよ繭死にむりなとと稱へ繭内にて蠶や蛹の死にただれたるものある時は必ず此等の繭より一種の心地あしき臭ひを發散するものである左するとかつをむしは此臭ひを嗅ぎ付けて外より蠶室内に飛入り繭の面に止まりて卵を産付けたり或は繭を喰ひ破りて繭内にある蠶や蛹の斃れ死したる者に卵を一二粒づつ産付くるものである此卵は長楕圓にて少く曲りてをり長ケは六七厘位で色は白い故に繭面に産み付けたる卵は之を認むることが甚だ六ヶしい此卵は數日にて孵化し初めて小形の仔蟲がいたむしずみむし等の名がある(る)が出て來る此者は色は白いけれども少しく薄茶色を帶

び體の全面には細長き毛を生じてをる其喰み食する者は  
 死したる蠶や蛹であつて之を食ひ終らば近傍にあるびし  
 よ繭死にこもりなどに食ひ入り再び死したる蠶や蛹を食  
 となし之をも食ひ盡さば良繭内にも食ひ入りて死蠶死蛹  
 を食することが甚しい右の如くがいたむしは初めの程は  
 只汚れたる屑繭に聚まるものではあれど後ちには良繭を  
 も食ひ破るものであるから良繭は屑繭となりて價值がな  
 くなるから損耗を受くることが中々少いことではない加  
 之製絲家が製絲の材料として倉庫の中ちに貯へたる蠶繭  
 の中ちにも蝕ひ入り繭に蟲孔を開き屑繭となすことが隨  
 分夥ひ尙ほ蠶繭にかつをむしがいたむしが多く聚りたる  
 時は只だ蠶繭を蝕ひ破るのみではなく頻りに蟲糞を繭面

に排出するが故に之が爲め亦繭質を損することが多いの  
 である故に養蠶家や製絲家は殊の外此蟲害を恐れて居る  
 は決して無理ではない又た此害蟲は動物肥料特に鱈・鯪な  
 どの搾粕類に聚りて之を蝕することも甚しい特に右等の  
 肥料は大の好物であるから大抵其中ちには何時でも此害  
 蟲を見ることができると又此害蟲は繭節屋には必ず蕃殖し  
 て居て繭節を食することが甚しい繭節屋の亭主の常に困  
 つて居る害蟲である此蟲害を避けんが爲め繭節を溢紙や  
 厚紙の袋に入れて貯へ外より決して害蟲が入り込まない  
 やうになし置きても間々袋の中に害蟲を見ることがある  
 から害蟲は繭節にわくものと見做してをる者もあるが是  
 れは大ひなる誤りにて蒔かぬ種ははへぬと云ふ諺の通り

種がなければ決して芽がでることはない卵がなければがいたむしもかつをむしも出来るものでもないつまり袋に入れたる鱈節に害蟲の發生するのは鱈節に害蟲がわきて出来たものではなくて袋に入るゝ前に既に鱈節に卵が産み付けてあるから袋に入れても之が孵化してがいたむしが産れ出で従て翅のあるかつをむしが現はるゝものである右の如く此害蟲は鱈節屋には多く棲みて鱈節を食するものであるから翅のある蟲も其幼蟲もひつくるめてかつをむしと云つて居る

是れよりかつをむし(羽蟲)がいたむし(仔蟲)を驅除する方法を話さふと思ふ

第一 びしよ繭死にせよりなどの如き層繭にて害蟲の

聚り易きものある時は簇より掻き取るや直ちに良繭と區別し置きて充分に乾燥し一つ所に纏め置きて良繭と共に一室内に入れ置くことを禁じたが宜しい又害蟲の入込むことを免れざる場合には鱈・鯡などの搾粕を藁苞に入れ之を室の片隅に懸け置くが宜しい左すれば害蟲は多く此藁苞に聚まるものである此聚まりたる時を待ち一時に之を捕へ殺さば中々驅蟲の効能がある蠶繭貯藏室にも害蟲は常に入り込むものであるから同室の窓や入口には細かな目の金網を張りて害蟲の入込むのを防ぐを第一となし次で室内に往來する者は成べく之を捕へて殺し又其發生は多くして容易に捕ふることの出来ない場合には蟲害を受け



たる蠶繭は之を乗せたる籠と共に殺蛹室に入れ熱を加へて害蟲を全滅せねばならぬ又蠶繭を貯藏室に入る、前には先づ同室の隅々までも奇麗に掃除し害蟲を除くことが肝要である且貯藏室に入る、蠶繭のうちには害蟲の嗜める屑繭を混入せざることも必要である

第二 鯉節をして此蟲害より避けやふとする時は左の方法を實行するが宜しい

鯉節を貯へる樽や箱の中中には假令蓋をなしたるとて確と蓋をなさない時は兎角かつをむしやがいたむしが容易に入込みて鯉節を蝕害することが夥しい且又かつをむしは鯉節の割目裂目や凹み等の中に卵を産

入る、ものなれば鯉節を樽箱などの中ちに入る、前には一々鯉節を吟味し丁寧に掃除して之に産み付けたる卵は盡く取除き害蟲の發生を防ぐことが必要である又冬日はがいたむしは樽や箱の底或は鏡蓋などの中ちに蟲孔を蝕ひ開き之に蟄伏し或は蛹となりて同く之に蟄伏して居るものなれば此蟄伏する時期に害蟲を驅除するも必要である右の如くがいたむしが蓋や底の蟲孔に蟄伏せしめないやふにするには其内側に鍍葉板だの亜鉛板を張りつめるがよい又鯉節屋の店頭みせまきの飾箱かざりばこの中にもかつをむしもがいたむしも入込み鯉節を蝕害することは少くない依て右の飾箱の蓋は確と隙間のないやふになし硝子板びやうしばんを張りつめる

か又は目の細かなる金網を張りて害蟲を入れないやふにするが宜い  
捕へたる害蟲は硝子瓶の中ちに容れ其多く蒐集したるを待ち熱湯を灌ぎ入れて害蟲を殺さぬばならぬ若しも左はせずして手近かにある箱や籠などの中に入るゝならば多くは這ひ出して逃げ又候患害をなすものである

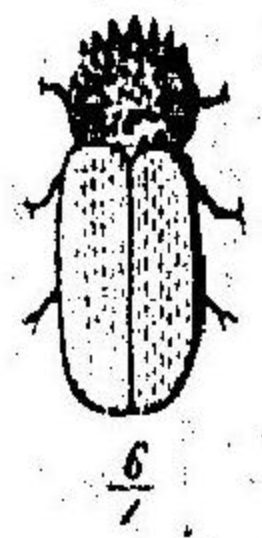
第六 箆筒むし(第九圖)

此蟲は大抵屋内に棲み居て桐製の箆筒・長持・小袖櫃其他箱類に寄生し特に其幼蟲の如きは桐材を蝕害することが夥しく毎年此蟲害に罹り損害を受くることは實に驚く程で

ある若し此害蟲の形を認め之を驅除したならば家具は蟲害を受けないやふにならふ

箆筒蟲は一種の甲蟲であつて其體は筒形にて背面より見る時は前後の兩部に區別することができ前部は後部より遙に小形にして黒く其全面には密に小點紋があつて前

第九圖 たんすじし(原圖) 縁には二三列の黒き刺の如きものがある此



刺や小點紋をなせる前部は丁度頭部の如く見ゆるも頭部ではなくて所謂前胸と云へる

ものであつて本當の頭は前胸の下に匿れてをるから背面より見ることが出来ない此前胸に接してをる後部は長形にして赤褐色を呈してをる之は前翅であるも其質は厚くして堅きが故に普通の翅とは全く異なつてをり其面には

數條の點線が縦走してをる脚は何れも短小であるから是亦背面よりは認め難い

此甲蟲の幼蟲仔蟲は箆筒長持等の桐材内に寄生し縦横に蟲孔を蝕ひ穿ち加害部の表裏には所々に小さな圓孔が開きて之より細かなる木屑が漏出してある此木屑は引出しの中ちに積み重なり或は引出しに重ね入れたる衣類などの上に積りてある此木屑が古く見ゆるのは蝕害を爲さるときであつて蝕害の盛んなる時には木屑が新らしく見ゆる蝕害の甚しき時は春夏の頃であつて秋冬の頃は蝕害をなさぬやふである幼蟲は體が太り殆ど白色で口具は丈夫で久しく桐板を咀嚼するに適ひ脚はない幼蟲の蝕害に罹り易ひは桐板の新きものにて古くて能く

乾きたる者は蟲害に罹ることが少ない加之箆筒長持桐箱等を風通しのわるい濕りたる所に置く時は蟲害に罹るものであるが風通しがよくて乾きたる所に之を置く時は蟲害に罹ることが少なく或は全く之に罹ることがないこともある

右の如く箆筒長持其他箱にて蟲害に罹りたる時は其材料に使用したる桐板の面には彼地此地に小さな圓孔が開きてあるのみにて甚しく材質を害したることが分らない左れども若し小さな圓孔の開きてある傍らを壓す時は容易に凹み小刀の尖きにて被害の桐板の面を搔起さば害蟲の穿ちたる蟲孔が幾個となく穿たれ且蟲孔の幾分は木屑にて塞がつてある若しも害蟲の發生が夥くして蟲孔も

従て多く穿れてある場合には桐板の質は弱はりて容易に傷き破れて使用することが六ヶ敷なる程に蟲害を受くるものであるけれども箆筒・長持等の中ちに重ね入れたる衣類は蟲害を受くることがなく只だ衣類の上に木屑の積重せるものを見るに止まるまである

此の蟲害を除かんと欲する時は夏の土用中に箆筒・長持等より衣類を取出し蟲干しをなすと同時に箆筒ならば其引出しを悉く拔出して箆筒は勿論其引出しは一々炎天に暴露して(但し箆筒及び引出しの内外を日光に晒し)其害蟲の成蟲も幼蟲も共々斃死せしむるがよろしい又た蟲害に罹り易ひと思ふ時は箆筒・長持等の中ちには少量づつ樟腦を容れ置くが宜しい樟腦の氣が失せたる時には直ぐに樟腦

を入れるゝが必要である又樟腦の代りに「ナフサリン」(是れは白い結晶したるものにて藥店にて販賣してをる)を少しづつ小形の袋に容るゝか又は紙包みとなし箆筒や小袖櫃・長持ち等の中に容るゝがよい又夏の土用中衣類の蟲干しをなす時は必ず之を入れ置きたる箆筒・長持の類は充分に炎天に晒し驅蟲することが必要であり且右等の家具は可成風通しのよい乾燥勝なる所を選び之に据へ置くことに注意しなければならぬ

第七 書物蟲(第七圖)

此蟲は常に日本紙にて製したる書物を蝕ひ大患を爲すものにて書物の蟲干しをするのは重もに此蟲害を避くるため

なのであるさて此蟲は甲蟲の一種にして長クが大抵一分許の圓筒形の蟲であるが背面より見る時は紡錘形をなしてをる頭は小さくして胸の下に匿れてをるから背面よりは頭を見ることができない體は濃褐色のものもあり黒褐色のものもありて一定してをらぬ但し體の全面に均しく小さな點紋が密に存じてある頭にある鬚は稍や長くして其尖きをなしてをる三つの節は太くして平たな紡錘形をなしてをり脚は短大であつて歩くことは甚だ緩かである幼蟲仔蟲は圓筒形にて肥へ太つてをり長クは大抵一分三四厘で幅が五厘許もある體には横走せる大蹠があつて體の色は淡黄である口部は濃褐にて口具は丈夫で自由に書物に蟲孔を蝕ひ開くに適つて居る脚は三對あるけれど

も其形は不完全にて歩行することは極めて拙ない」

さて日本書を本箱に納め久しく其儘になし置く時はいつの間にか書物蟲が本箱の中ちに入り込み表紙や綴ち口の方より蝕ひ入りて縦横に數枚若くは數十枚の紙に蟲孔を蝕ひ穿ち甚しきに至ては蟲孔を縦横に蝕ひ穿つが爲め紙

第十圖 書物むし (原圖)

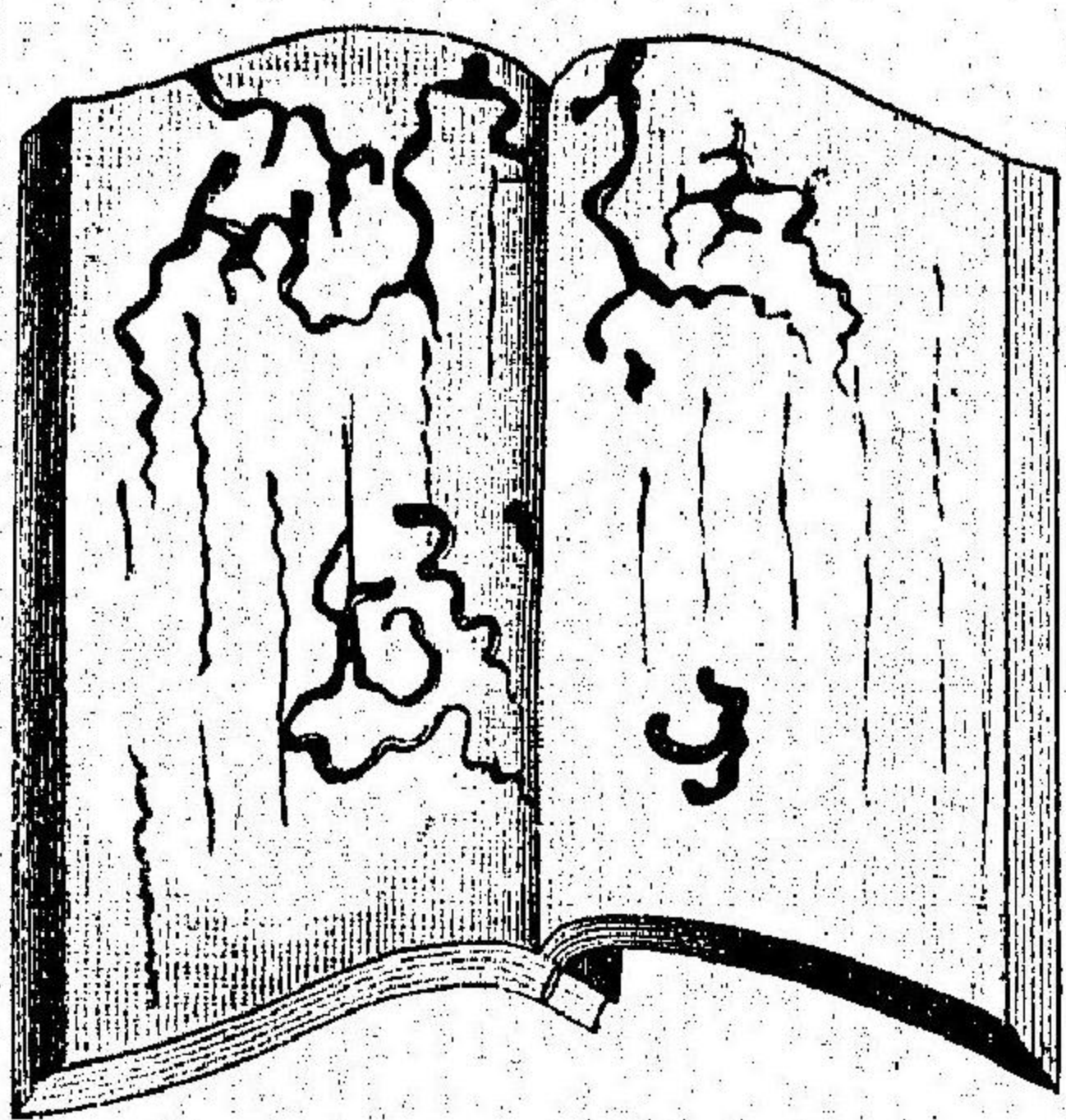


は切れくとなり破れ取れ遂には字を讀み下たすこともできなくなり殆ど廢物となることが少くない

書物の内側に穿たれたる蟲孔は丁度唐草の如く或は蚯蚓のあるきたる跡の様であるから蟲孔の形にて蟲の種類を區別することが容易い(第十一圖右の如く書物の内側は甚しく蟲害に罹つて居ても表紙や綴ち口を見る時は別に蟲害

に罹つてをることは分らない然し此所には害虫の出入したる小さな圓ひ孔が開いてをるだからして書物の表に小孔の開きたるものがあらば其内側は多少虫害に罹つてを

第十一圖 被害の書物 (原圖)



罹らないやうに注意することが肝要だ

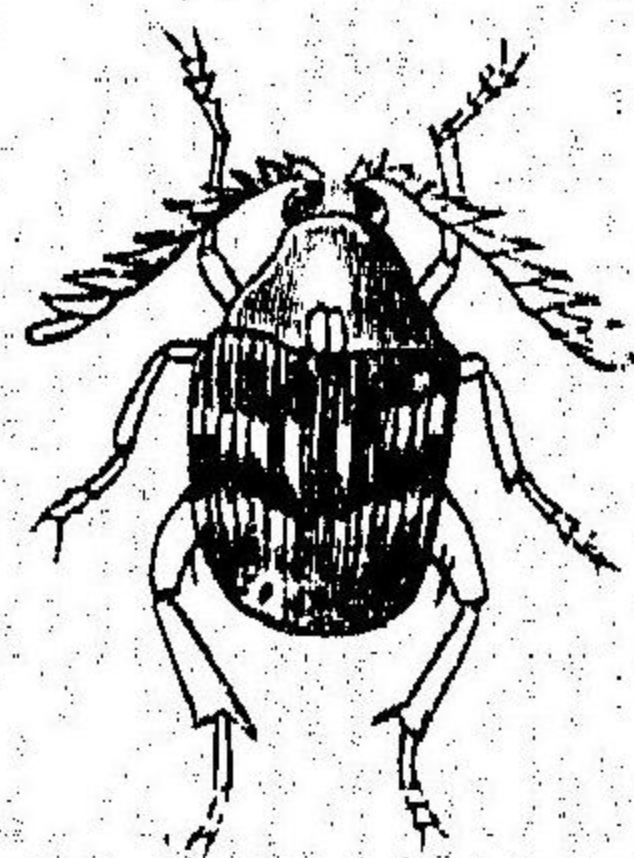
ることが分るのである  
此害虫も衣魚と同じ様に日本紙にて製したる書物のみ寄生して其紙葉を蝕害することが甚しいけれども西洋紙の書物には虫害を及ぼすことは殆ど皆無と云つて宜しい故に日本紙の書物を所有してをる者は常に此害虫に

一體此書物虫は風通しの宜くて乾燥したる所に置ける書函には蕃殖することが少くて鬱閉して濕潤なる所に置ける書函には其蕃殖が一層甚しい様に見へる故に夏日炎熱なる時を選びて書物の虫干を爲し紙葉間に横はる害虫を殺さねばならぬ又虫干したる後再び本箱の中ちに書物を納むる時に樟腦又は「ナフサリン」を小さな紙袋に入れ之を本箱の大きさに應じ一二個づつ其隅に入れ置き害虫の侵害を防ぐがよい但し害虫を防ぐには樟腦よりも「ナフサリン」の方が一層効力がある尙ほ此等の驅虫薬は一ケ年に一二回は取替へ常に薬の臭が絶へない様にしなければ驅虫の効力が薄くなるものである

第八 小豆蟲あづきむし(第十二圖)

小豆蟲は小さい丸形の甲蟲で長ケは一分位だ黄褐色を帯び濃い褐色の斑紋がある頭は小形にして胸の下に入り込み眼は黒く鬚は長い胸の中央には黄色の縦線が走り其後縁の中央には黄白の長楕圓の斑紋がある翅鞘(翅鞘とは腹の背面を覆ひ匿くしてをる堅い厚い翅のことである)は黄褐ではあるが其面には數條の縦線と濃褐の帶紋が存してある此蟲は穀類を貯へる倉庫の中ちに棲み或は屋内に貯へたる小豆類に卵子を産み付くるものである此卵が孵化して幼蟲が産れ出でたる時は直ちに小豆内に蝕ひ入りて其内容を食すること甚いものである幼蟲の寄生したる小豆を見る時は其面には蟲孔が開き且つ内部は空虚となる

が常である故に此蟲害に罹りたる小豆は食用とすることが出来なくなるが常である故に小豆を賣買するものたの或は菓子材料として貯ふる小豆の如きは此の蟲害に罹ることが決して少くないと思ふ幼蟲は長ケが一分前後ある第十二圖 あづきむし (原圖) つて能く肥へ淡黄色を呈して居り頭は赤褐にて小さく皮膚には横皺を存し脚はな



此害蟲を驅除するには時々小豆を調べ害蟲は嚴く捕へて殺すことは勿論なるも一々被害の小豆を拾ひ出すことは容易くない依て調べやふと思ふ小豆は之を水に投ずるが宜い斯くする時は被害の粒は其目量は一層軽さがため水面に浮び無害の者は水底

に沈むものであるから兩者を區別することが出来る右の如く水面に浮びたるものは之を取り集めて害蟲を驅除することが極めて要用である又倉庫などの中ちに害蟲を多く發生したる場合には倉庫を丁寧に掃除し且相當の驅蟲劑にて倉庫内を蒸蒸し害蟲を驅除せねばならぬ場合もある

屋 内 の 動 物

第九 蛾 蠅 (第十三圖)

蛾蠅と云ふは蠅の類にて體は太く幅が廣く翅は二枚あつて是れも幅が廣い此體にも翅にも厚く毛を生じて居り外貌は丁度小さな蛾の様に見ゆるが故に蛾蠅と云ふ名が付てある靜止する時は屋根形に背上に横へて居るか又は地

蛾

平に横へて居る地平に横へたる時は殆ど三角形をなしてをり所謂達摩の形をなしてをる蟲である頭には眼も鬚もあつて鬚には厚く毛が生じてある此蟲の幼蟲は牛の糞に棲み或は水に棲むと云ふ事である

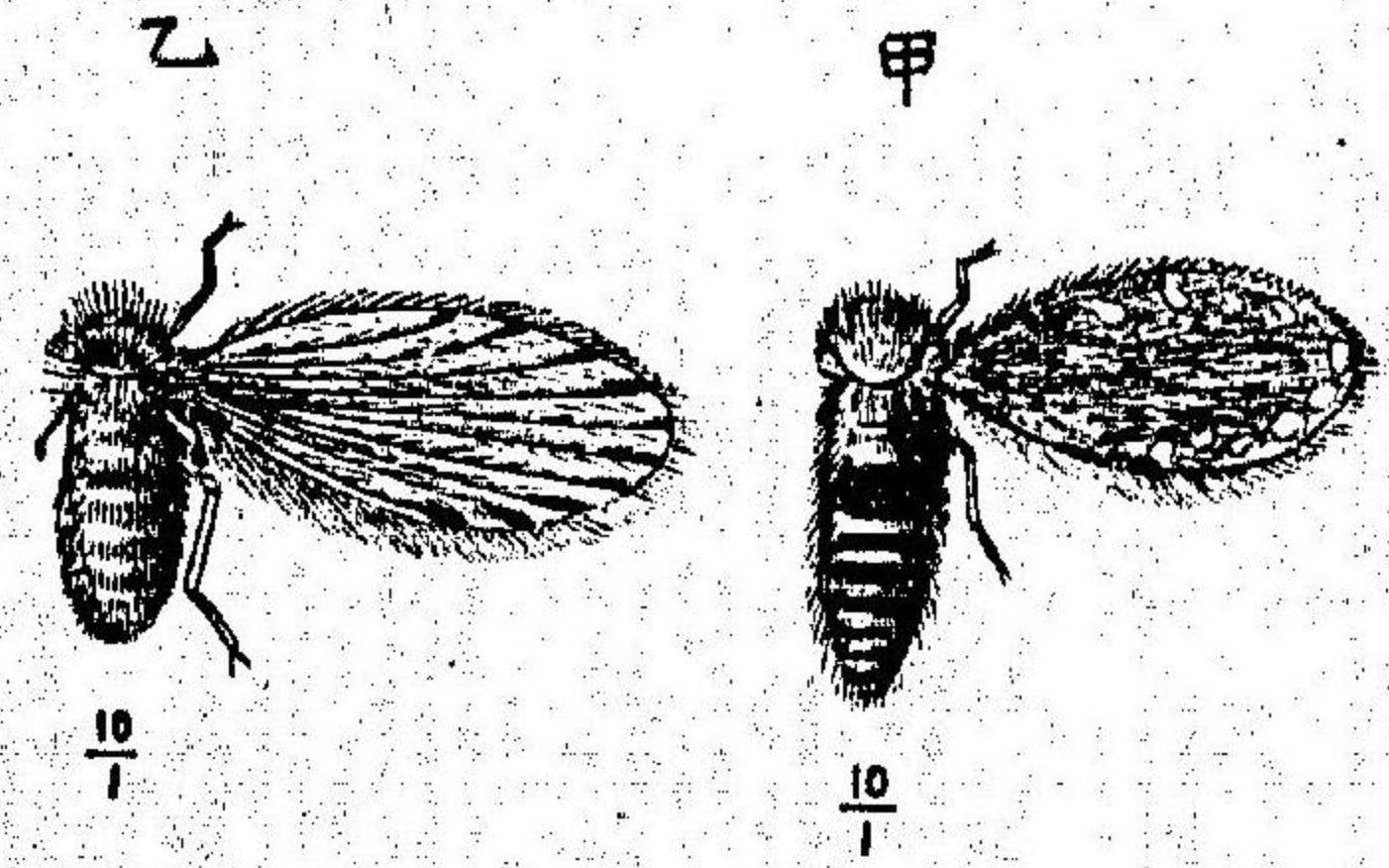
蠅

蛾蠅には數種あるが普通見ることのできる者は二種位らしい甲種は長ケが六厘位で體も翅も密に黒ひ長い毛にて被はれ鬚は念珠の如くにて長毛を生じてをり翅には亦長毛を生じて居るが其周りには數個の白點がならんでをる乙種は甲種よりも一層小さくして長ケが五厘しかない體にも翅にも密に灰色の毛を生じて居り翅の周りには十個許の濃ひ褐色の點紋がならんである  
右の蛾蠅は冬日には見へないが春夏秋には多少障子や硝



第十三圖 てふはい

甲 くらてふはい  
乙 灰色てふはい



子戸や硝子窓に止つてをり時に雪隠の障子には多く止つてをる今や障子硝子戸などを氣を付けて見る時は往々其面に小さな黒ひ三角形或は達摩形の蟲が疾くはい廻つてをる時に依ると巴形に廻つてをり時々纒かの間を翅で飛ぶ少しく注意すれば誰でも目撃することが出来る此蟲は別に吾人に害を爲すことはしないから驅除するには及ばない若しや障子硝子戸に黒ひ達摩形の小さな蟲がはい廻つて居るならば是れは皆蛾蠅と見做して宜い閑散の時には此蛾蠅の舉動を見て居るのも中々面白く慰みともなる

第十 白蟻 (第十四圖)

はありは名から見ても蟻類の様に見へ形を見ても蟻類に似寄てをる蟲ではあるが篤と之を調べて見ると蟻類とは全く異なつてをる此蟲は重に屋内に棲んでをるものなるも間々野外にも棲むものであつて屋内にては柱だの木製の家具類に巢を造り患害を爲すことが常であり又野外にては材木の置場にある木材を初めとして場合に依ると立ち木などにも巢を造り木材を損すること多く或は立ち木を枯らすことがある

はありは温帯及び熱體地方に産するものであつて寒帯地方には産しない本邦にては大抵何れの所にてはも棲んでをる往々人目に觸るゝものであるから大抵の人ははありと

云へば如何なる蟲であると云ふことを知つて居る斯くはありを知つてをる人の多いは往々家屋土藏等の柱に巢を穿ち六七月頃には數多の**白蟻**が飛んで居たり這つてをるがためである

**白蟻**は社會的生活を營む蟲にて常に數百數千頭の**白蟻**が群棲するものである故に若しも一二頭の**白蟻**を見る時は其近傍には必ず夥多の同蟲を見ることが出来る**白蟻**の一群を調べて見ると都合四通りの**白蟻**がをる其中の二た通りは雌と雄とにて残りの二通りは兵蟻と云ふものと職蟻と云ふものにて此等四種の**白蟻**は一致共同して社會的生活を營み分業して夫々其職務にはげんでをる面白き蟲である雌雄の兩蟲は常に翅を具へてをるも兵蟻と職蟻と

屋 内 の 動 物

白

蟻

は翅がないから彼是の區別はたやすく出来るものである雌蟲は扁長にして鬚は念珠形をなし四枚の透明なる翅を具へ産出後は暫時空中に飛翔するも直ちに翅は落ちて飛ぶことができなくなる故に自然脚にて這ひ歩くものとなる雌蟲が孕める時は腹が非常に腫れて數十倍の太さとなりて中ちに幾萬と云ふ多數の卵子を入れてをる然し此雌蟲は容易に見ることのできぬものにて著者は是まで幾回も**白蟻**を見たるも未だ一回も大きな腹の雌蟲を見ることがない雄蟲は亦體が扁長で暗灰褐を呈して居り鬚翅などは雌蟲と同じことで靜止する時は四翅を背上に地平に横へる此翅も容易に離れ取れるものなれば雄蟲發生の際には多數の翅のなき雄蟲は地や牀の上を這つてをるのを

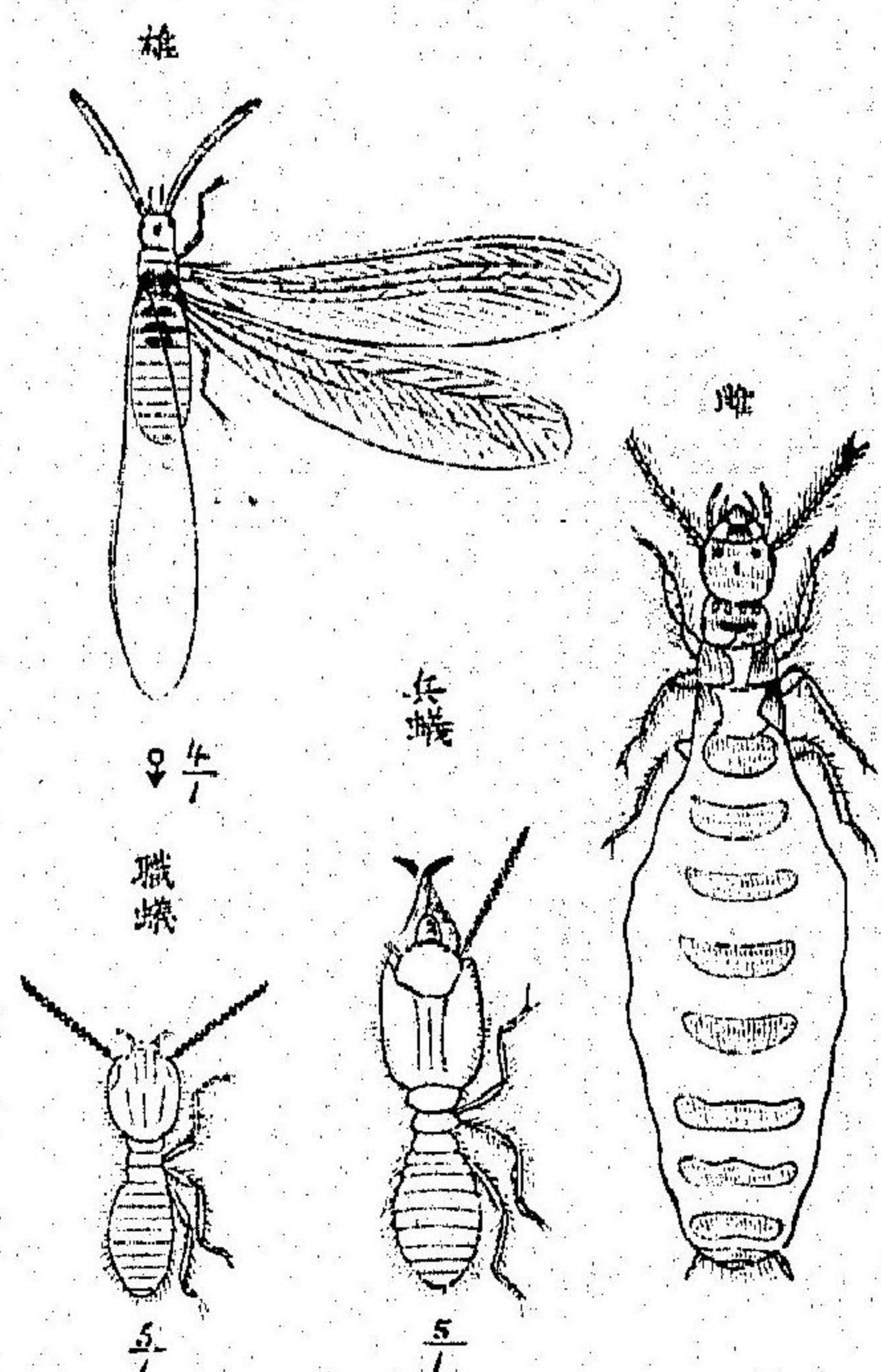
見ることが出来る

兵蟻は灰白にて長ケ一分五六厘もある其頭は殆ど橢圓形にて非常に大きく其長ケは全軀の半ば程もある又頭の前縁には眼があり念珠形の鬚があり齒(上顎)も亦著しく長大にて頭の前面に伸び出で怖ろしき武器をなしてをる兵蟻の職務は番兵にて常に巢内の所々に見張りを爲し或は巢の出入口を守りて巢内に侵入しんとする者ある時は直に右の武器にて咬み殺すのである

職蟻は兵蟻と同じ色にて長ケが一分前後しかない故に兵蟻よりは一層小形である此頭も可なり大形ではあるが兵蟻の如く強大でなくて齒も小さい頭の前面に伸び出でない鬚は矢張念珠形であつて眼がない蓋し職蟻は常に材幹

内に居りて縦横に「トンネル」を蝕ひ穿ちて巢を營むのが職務であるから丁度坑夫が鑛山の内で働いて居ると同じことである坑夫ならば時々坑内より出でて日光を見るも職蟻は終始巢内に棲み若しも日光に觸るゝことあらば直ちに巢内に逃込み暗黒

第十四圖 はあり (原圖)



第十 白蟻

を好める性質の者であるから眼の入用がないだけに依て眼は次第に退化して殆ど其痕を失ひたるものらしむ

前きに陳べたるが如

六三  
 く雌雄の兩蟲が産れ出れば先づ卵を生むに適へる木材柱などの中ちに入り込み雌蟲は若干の職蟻兵蟻を産む此者は夫々「トンネル」を穿ちて巢を造りたり或は見張りをして害物の巢内に入込まんとする者を防ぐ其後雌蟲の體內には數萬の卵子が生じ腹は非常に膨腫し次で一分間に六十顆許づつ卵子を生み一日には約八萬餘の卵を産むものなりと云ふ此卵が孵へる時は雌雄の兩蟲を初めとして許多の兵蟻職蟻も産れ出で材質其他植物性の物を食して成長し木材柱卒には立木などの中ちにも入り其材質を食して縦横に蟲孔を蝕ひ穿つものなれば材質は非常に蟲害を受けて腐朽し廢物となる此蟲害に罹りたる木材柱などは假令其内部は縦横に走れる蟲孔にて滿され材部は全く朽ち

何等の用を爲さない様になる其材面には別に蟲害を受けたと思ふ程の徴候はなく只だ僅かに小孔又は小裂孔の開けるを見る位なものであるが篤と注意する時は右等の孔には兵蟻が出入するのを見ることが出来る若し家屋や土藏の柱が白蟻の害に罹りたる時は柱は曲つたり挫けたりするから家屋土藏等は傾き恐るべき損害を受くることはいないとは云へぬ東京市中には往々家屋土藏等が白蟻に侵さるゝことが少くない地方にても少しく注意したらんには之に侵されをる建物は決して少くないと思ふ右の如く白蟻は小形にして其體は柔かなれば潰殺するは容易いけれど蟲害の甚しきに至る迄は被害材幹や柱の面に於ける徴候が明かでないから其所在を認めて驅除する事が手遅

れとなり易い

白蟻が発生したる場所を見付けたならば其側に横はれる古る木材だの腐敗に罹りたる丸太の類はすべて之を取除き害蟲の蕃殖を豫防せねばならぬ又被害の木材若くは柱などを見付けたるときは之に熱湯を灌ぎて驅蟲なすも宜しい

白蟻は幾分か濕りて風通しの悪しき建物の木材に巢を營むことが多いゆへ日當りを宜くし風氣の流通を良くする時は自然に此蟲害を免るゝことができる又被害の木材には二硫化炭素を注入して驅蟲するも効能がある亦た被害の立木にも二硫化炭素を注入して害蟲を驅除するが宜しい

屋 内 の 動 物

第十一 蟻 (第十五圖)

蟻には數多の種類があるが屋内に入込み砂糖菓子類其他甘味の物に聚て之を食する者は赤蟻、小黑蟻、熊蟻の三種位であらふ。赤蟻は長クが一分足らず位で暗赤色を帯び體は稍や瘦てをるも頭は大きくして幅は至つて廣く鬚は稍や長くしてく字形に折れ曲つてある胸部は長くして後胸の左右には一本づつ鋭い尖がある脚は細長きも丈夫であり腹は殆ど圓錐形であるが其第一と第二の二節は極めて細く小莖の様に見ゆる之にて腹が胸に連つてある故に丁度細腰をもつてをる様に見ゆる

此蟻は夏日になると縁側に這ひ登り夫より敷居傳へに室内に入込み諸方を這ひ廻つて食物を捜し若しも菓子其他

甘味の物を見付けられたならば速に仲間の居る所に立戻つて獲物のあることを告ぐるものらしいサーズなると數百數千の赤蟻が續々と一筋の通路をたどりて例の甘味の物に來集し頻りに之を食し之に飽く時は去るけれども餓へたる赤蟻は跡より入替りて頻りに貪食するが故に暫くの間菓子や甘味の物に群集して眞赤になる程に見ゆる小黒蟻も赤蟻と大抵同じ性質のものにて是れも砂糖菓子等に聚りて食するものである

熊蟻は形ちは赤蟻より遙かに大形にて長ケが大抵四分許にて黒い此蟻も矢張夏日に多く出で來り屋内に入込み疊や板の間の上を走り砂糖菓子類に聚り之を食するものである砂糖などを腹一ぱいに食したる時は腹がふくれて走

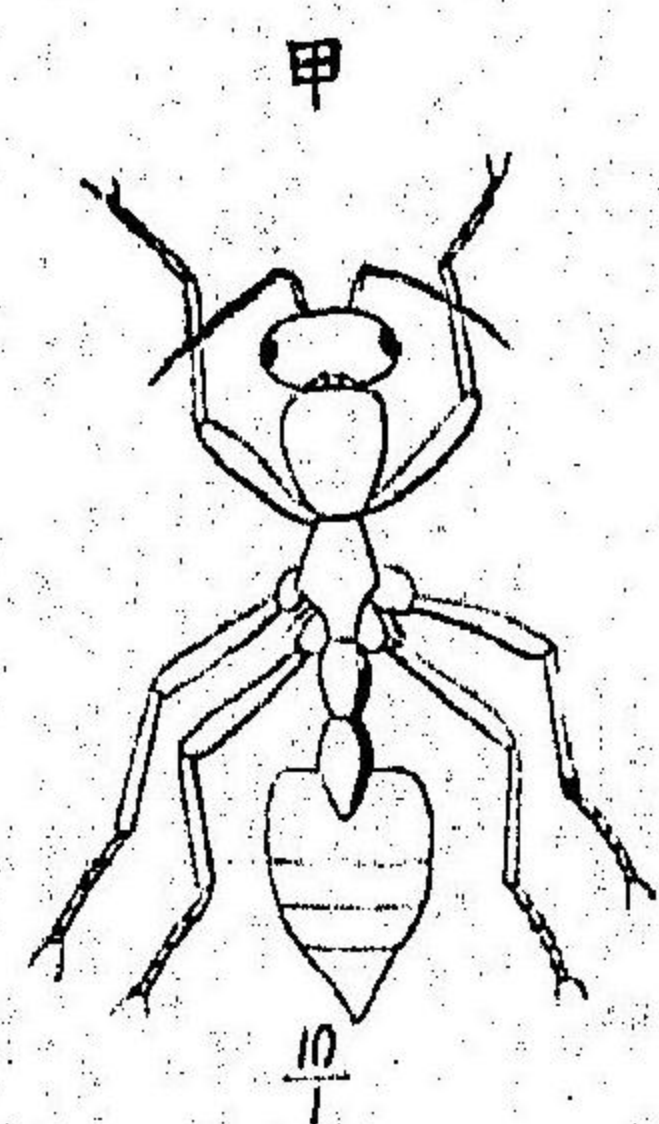
ることが拙なくなる之を潰さば腹より多量の砂糖汁が流れ出づる熊蟻も赤蟻同様に一筋の途を通りて往來するものではあるけれども時に依ると一定の道筋を履ますして左右に片寄り走ることがある

右等の蟻類は只だ家屋内にある食品を食ひ荒すのみではなく尙ほ甘味のある果物にも集まり其汁を吸つたり果肉を食つて居る

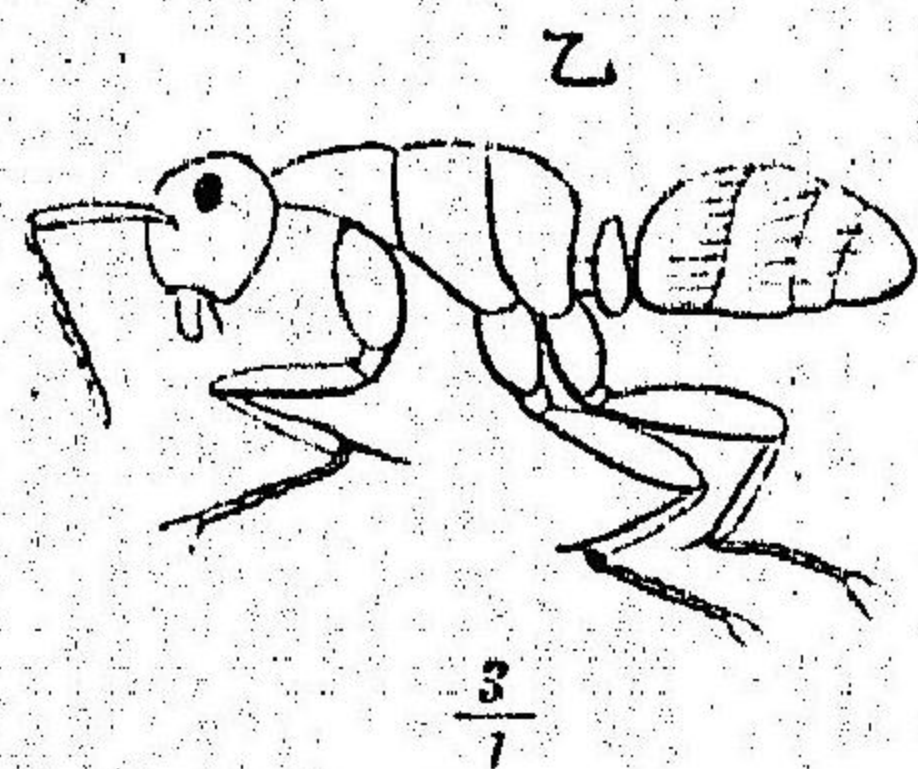
食品に蟻類がたかつて居るは實に心地あしきことで誰でも蟻を嫌つて居るは決して無理ではない只だ蟻がたかつて食するのみなれば格別心地悪いと云ふ程でもないが兎角蟻が食すれば之に應じて糞を排出するものゆへ蟻の多く聚りたる食品の上には常に多く蟲糞が横はつて居る其

糞の見易いのは白砂糖である若しも蟻の多く集まりをる砂糖を見るならば小さな黒い蟲糞が多く散在してある之

第十五圖 甲 あかあり(原圖) を見ると胸がわるくなり食ふ氣にな



らぬは尤ものことである但し着色したる菓子類ならば蟲糞は容易に認め難きも蟻がたかつてをれば蟲糞の付着せるは決して間違ひがないから用心して食はぬがよい



右に述べたる如く屋内に入來る蟻類は種類の如何に拘はらず綜べて職蟻と云へる者が巢を造つたり食を搜したりするのが職掌で生殖の作用は更

に營むことのできないものである此職蟻の外に翅のある雌雄の兩蟲が居り交尾して職蟻の造りたる巢の中ちに産卵するものである此卵より孵へりたる仔蟲は職蟻の保護に依りて成長し蛹さなぎとなり雌雄と職蟻とが生れ出するものである通常蟻類の巢を掘り返へすと職蟻が白い米粒の如きものをくわへて逃げ行くものがある之を俗に蟻の卵と呼びなして居るも卵ではなくて蛹の入つてゐる繭まゆである之にて魚類を釣らば多く漁することが出来る

屋内に入込める蟻類を捕へるには種々の方法がある菓子屋などは菓子箱を乗せたる臺の脚を水を盛りたる平底の器物に浸して蟻の來襲を防いで居る是れは最も簡便にて蟻害を免かるゝことができる

除虫菊の粉末(蚤取り粉の類)を蟻の路筋に振り蒔く時は蟻類は其臭を恐れて逃ぐる又之を蟻に振り掛くる時は早晚麻痺して脚が亂れ走ることができなくなりよろめきて遂に斃はれるが蟻の種類に従て早く斃るゝものと遅く斃るゝものがある

石炭酸若くは「ナフサリン」(劇薬なり)の類を蟻の往來する側に置く時は蟻類は其臭ひに恐れて寄付かぬものであるけれども石炭酸といひ「ナフサリン」と云ひ臭ひが悪きものなれば食品の側に之を置くは宜くはない注意が必要だ  
屋内に蟻が入込める場合には其道筋をみちしるべとして其巢のある所を捜し之に二硫化炭素と云へる液體の藥品を注入して巢内に居る蟻を悉く殺すがよい二硫化炭素は

無色透明の液にて一種の強臭があつて且つ火を呼び爆發する性質のものなれば其臭ひは成るべく嗅がぬやうになり且つ其側にて烟草をのむことを禁じ火氣は綜べて之に近づけざることが必要である若しも此注意をこたへる時には大害に罹るゝを免れないと思ふ

蟻類を誘引して驅除するも亦一種の便法である即ち牛馬の骨を買ひ來りて之を碎き蟻の往來する所に置かば蟻は多く之に聚るものである其聚りたる骨を火に投ぜば夥多の蟻を一時に焼き殺すことができる又一法には砂糖水を製して之を海綿に浸したるものを蟻の襲來する所に置かば蟻は必ず多く之に聚まるものである其群集したる海綿を熱湯に投ずれば必ず巨數の蟻を驅除することが容易で



屋 内 の 動 物

ある右の海綿を熱湯に投げ入る、前には豫め別に砂糖水を浸したる海綿を用意し置き蟻の聚まりたる海綿を取去りたる跡には直に兼て用意し置きたる海綿を据へ置き再び蟻を集むることが必要である斯くの如く幾回となく海綿を取替へ蟻を集め殺す時は其數は著しく減却して遂に蟻害を見ざるに至る又硼砂と砂糖とを熱湯に溶かし舍利別となし之を平底の廣き品物に入れて蟻の往來する所に置くも多く之に聚りて斃はれ蟻害を避くる効能が少くない

右等の驅除法の中ち最も有効なるものは除蟲菊粉の成るべく細末になしたるものを蟻に振り掛け又は其路筋に振り蒔くこと、砂糖水を浸したる海綿にて蟻を集め熱湯に

投じ殺すことならんと思ふ

第十二 衣蛾(第十五圖)

衣

衣蛾は細小の蟲にて長々は二分ありて翅の尖より尖までは四分五六厘ある其體は灰褐にて胸は少く黒ずんである眼は黒く鬚は絲の如く前翅は灰黄にして其面に黒點黒斑等を存し翅の外縁に沿ふては灰黒を帯び縁毛も亦灰黒である後翅は前翅よりは遙に小形にて白色なるも其外半は淡黄を帯び後縁に生ぜる縁毛は極めて長し此蛾は一年に一回の發生をなすを常とするも地方の狀況に従て一ヶ年に二回の發生をなすことありと云ふ

此蛾は六七月頃に産出しあらゆる毛織の衣服や敷物車の

屋 内 の 動 物

前掛ケ其他毛皮にて製したる背囊馬具鳥獸の剝製類に産卵するものにて其卵より孵化せる幼蟲は其毛や羽毛を食して成長する其蟲害を受ける織物毛皮剝製類は其毛や羽毛が夥く蝕せらるゝが故に毛は抜け取れ或は咬み切られ羽毛も同様に抜け取れ咬み取らるゝものなれば織物類は其品質を損すること甚しく毛皮の類は只だ品質を損ずるのみならず殆ど使用することが出来なくなる又鳥獸類の剝製の類も此蟲害に罹りたる時は其外觀を損じ教授用の標本と爲すこともできず又裝飾具として室内に陳列することともできなくなる故に毛織の被服敷物などを所有しをるもの之を商ふもの毛皮具を所有するもの賣買するもし又は鳥獸類の剝製を所有したり又は之を製する者は常に

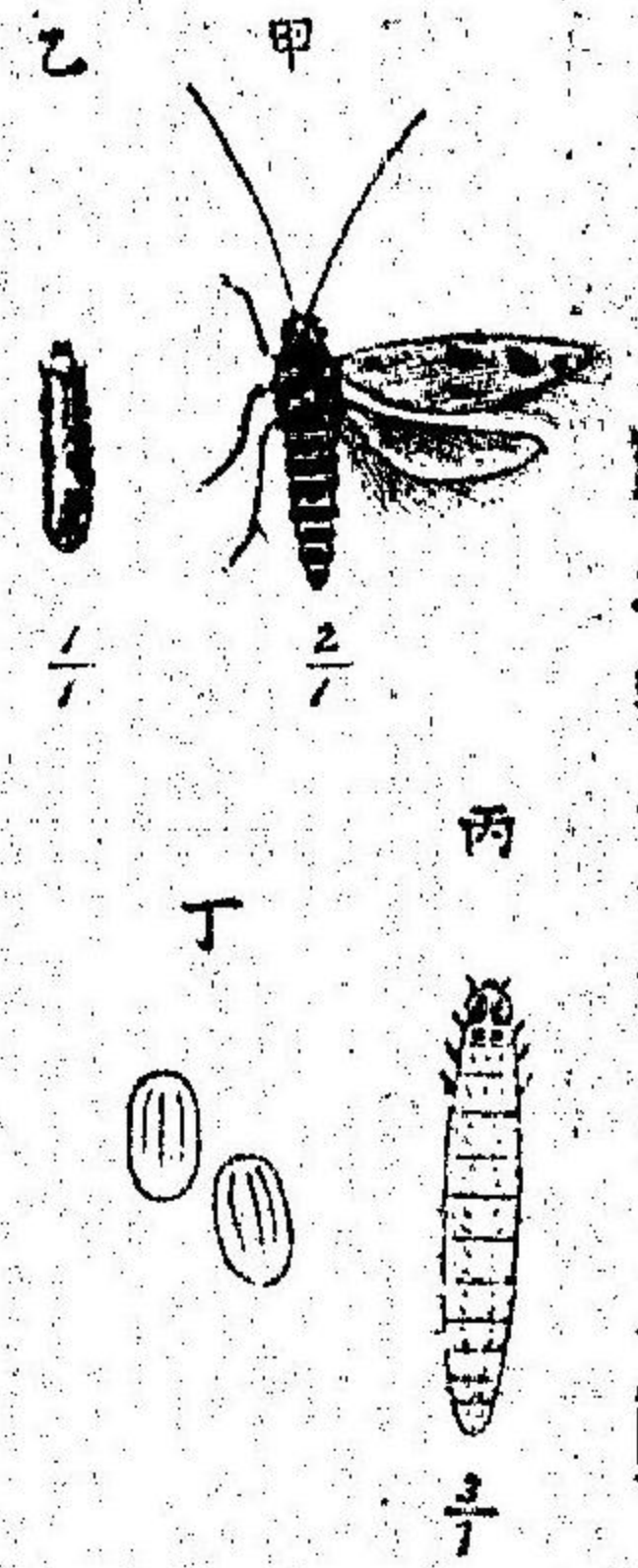
衣

此蟲害に罹りて損害を蒙ることは實に夥いことであるから常々蛾及び幼蟲の發生に注意し若しも其發生を認めたるならば直ちに之を驅除することを勤め其蔓延を防がなければならぬ尤も其發生を見て初めて驅蟲の手續きを爲すの必要は勿論なるも尙ほ害蟲發生の恐ある品物は之に害蟲の發生する以前に相當の手配りをなし害蟲の發生を豫防せねばならない

蛾

幼蟲は長ケが三分前後ありて灰白色である頭と之に次げる軀節は淡褐を帯ぶ常に毛や羽毛を咬み切りて之を絲縷にて纏め筒形の巢を營み之に全く蟲體を入れ頭と胸脚とを巢外に出だして這い歩き毛羽毛等を食するものである其有様は丁度果樹類に多く見ることの出来る避債蟲に

似よつてあるさて幼蟲は段々成長して是迄の巢は狭く小さくなりて蟲體を容るゝこと出来なくなりたる時には巢の側面を細長く蝕ひ破りて之に毛羽毛等の小片を簞め込み又右の側面に對する側面も同く蝕ひ破りて毛羽毛などを簞込みて巢の幅を廣げ且つ巢の兩端にも毛羽毛を絲縷にて綴ち付け巢の長々を延ばすものである故に若し幼蟲の側らに種々に着色したる毛類を横へ置く時は幼蟲は之を採りて巢の側面に簞め入れ或は巢の兩端に之を綴り付くるものなれば巢には種々の着色がちりばみて美麗なる巢が出来てくる右の試験をする時



第十六圖 甲衣蛾 乙巢中に在る幼蟲 丙幼蟲 丁卵 (原圖)

は如何に幼蟲が巢を廣げたり長くしたりすることが分り如何に巧みな技術を持つてをることが分る此蛾に似寄りたる者も二種類ばかりあつて其幼蟲も又毛織物・毛皮類を蝕害することが少くない此蟲害を豫防驅除する方法は大略左の通りである衣蛾及び其幼蟲の發生を豫防するには毛織の衣服敷物其他毛皮の馬具背囊等を四月乃至六月の三ヶ月間に天日に曝し或は剛ひ毛の刷毛にて梳れば衣蛾の産みたる卵や幼蟲を除きて蟲害を免るゝことができる尤も人の常に出入する室にある敷物の如き始終足にて履まれたり又は風氣に觸るゝ事の烈きものは殆ど蟲害に罹ることがなく毛織の衣類も同ことにて常に日光に當り風氣のよく流通する

所に置かば蟲害に罹ることが少ない故に此理を辨へて蟲害を免かるゝことに勤むることが必要だ

七八

毛織の衣類は木綿又は澁紙等にて製したる袋に納め確と其口を塞ぎて害蟲の浸入を防ぎて蟲害を避くるが宜し又板紙製の大箱の中ちに衣類を藏め置くも蟲害を避くるに宜し右等の如く袋や箱を使用するは單に害蟲の侵入を防ぐ目的に外なければ害蟲の侵入を防ぐに足るべき者であれば如何なる品にても如何なる方法にても別に差支はない

毛皮類の害蟲を避くるには相當の時期を見計ひ之を屋外に出して天日に晒し鞭杖の類にて強く打敲きて害蟲を掃ひ落すが宜い又鋼鐵の針金にて製したる櫛にて毛皮を梳

りたるのち害蟲の侵入を防ぐに足るべき箱の中ちに藏め置くがよい但し毛皮を打敲きたり梳るは二週日乃至四週日毎とに實行することが肝要である

毛皮類を多量に取扱ふ者は中々右等の方法を実行することとは餘程六ヶしい斯かる場合には毛皮の貯藏場の溫度を低くするのが蟲害を避くるに有効である其溫度は大抵華氏の四十度以下で充分である

馬車用の毛皮類を貯へ置き久しく使用せない場合には四月乃至八月に霧吹にて揮發油を毛皮に振掛くれば害蟲を驅除するに有効にして毛皮を損ずることがない又一法には火酒に少量の昇汞を溶解したるものにて毛皮を洗ふも驅蟲の効能がある揮發油を使用するときは火を近づけぬ

やふにせねばならぬ昇汞・火酒を用ゆる時は誤て其液を口に入らないやふにせねばならぬ又「ガソリン」を被害部に振り蒔かば能く毛皮にしみ込み害蟲を殺すに効がある又一法には被害の毛皮を貯へる部屋を二硫化炭素の瓦斯に蒸蒸するも害蟲を驅除するの効がある但し二硫化炭素を使用する時は火の類を決して近づけることを嚴禁せねばならぬ若し火の類を之に近づけることがあるならば必ず爆發の恐があれば充分に注意せねばならぬ

第十三 黒はだか蟲(第十七圖)

黒はだかむしは長ひ灰黒の蟲であつて長ヶが六七分もある皮膚は堅くて幾分か光澤がある通常倉庫内に棲みて米

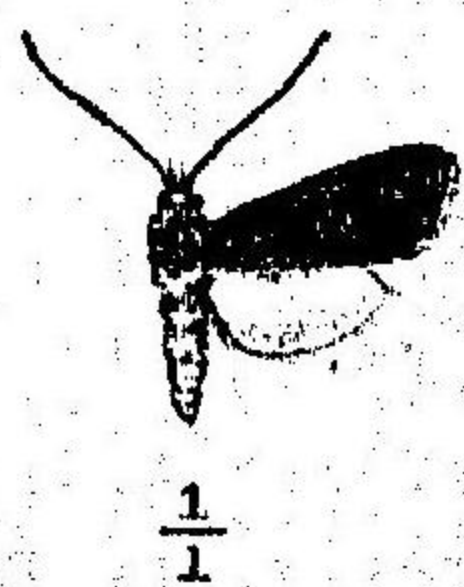
粒粟粒などを絲縷にて綴り巢となし此中ちに入り込みて之を食するものであるが尙ほ家屋内にも棲みて種々の乾燥したる動植物性の者を嗜食し患害を加ふるものである尙ほ暗葉なども食して害をなすことが多い若しも此蟲が嗜食する者の入りたる箱の中ちに入りたる時は其箱の隅に入り其箱を咬みて木屑をこしらひ絲縷を吐きて之を綴りて巢となし之に棲めるものである右の如く食して充分成長する時は巢中にて蛹となり七月の末頃より化して小蛾となり諸所に飛びて黒はだか蟲の食に足るべき者を選びて之に卵子を産むものである此卵は間もなく孵化して黒はだかむしとなり再び蟲害を加ふるものである此蛾は雌雄にて多少大きさを異にするが先づ雌蛾は雄蛾より大

屋 内 の 動 物

なる方にて體の長ケが三四分ありて開張したる翅の長ケが七八分もある此蛾の頭と胸は赤褐であるが腹部は灰黄であつて鬚は長く頭の前面には密に毛のはへたる刺の如

第十七圖 (原圖)

甲 ころはだかむし  
乙 ころはだかむし



甲



乙

きものが出てある是れは下唇鬚と云ふものである翅は前後二枚づつありて前翅は淡灰黄にて其面には幾條となく濃赤紫色の曲りたる條紋が横つて居り後翅は同じく淡灰黄色にて其内外の兩縁に接し纔に紫色を帯びるのみである

黒はだか蟲が盛んに増殖したる時は之が爲めに患害を受くることは決して少くない故に此蟲發生に適へたる物が

壁

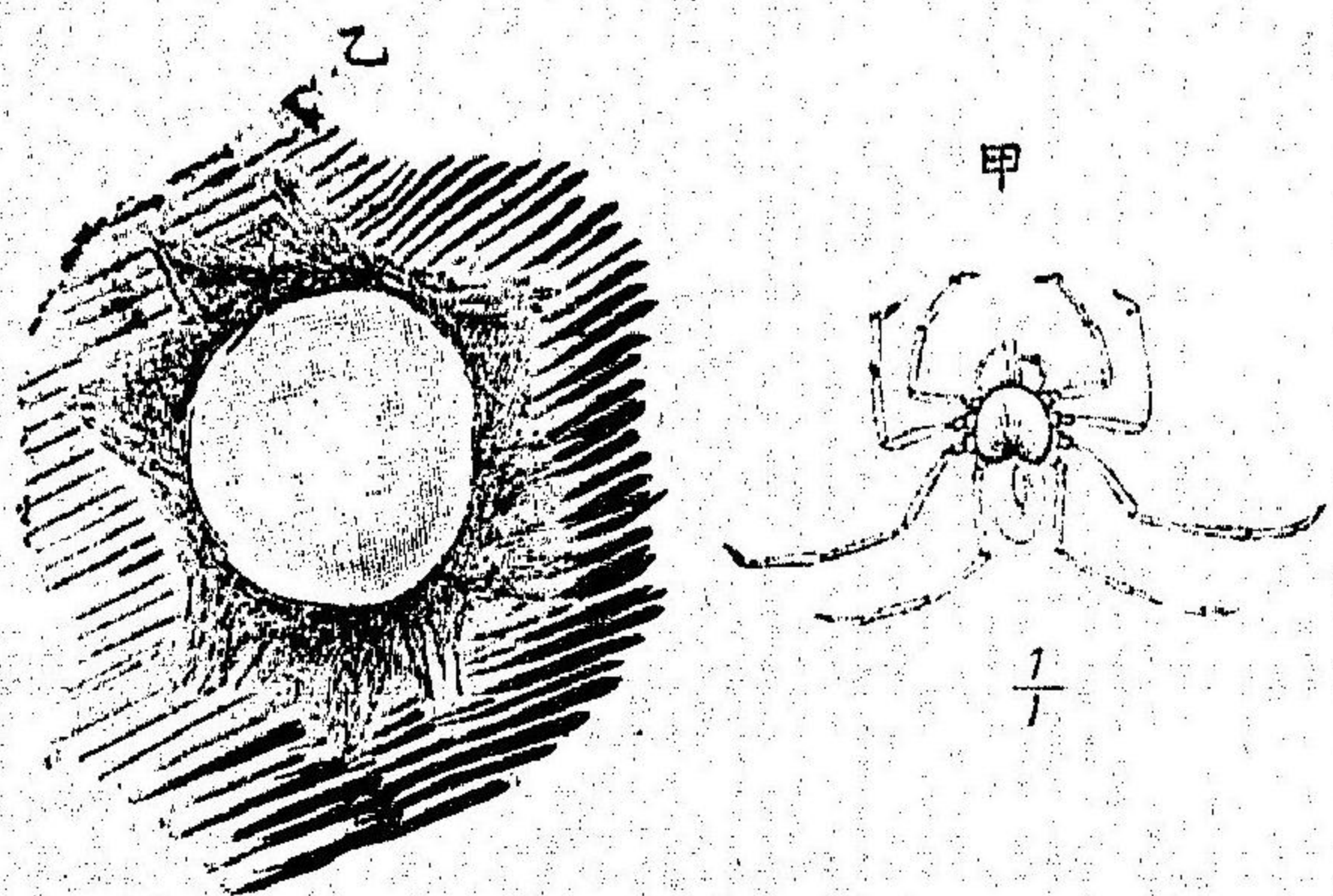
ある時は常々注意して害蟲の有無を取調べ若し害蟲の發生を認めたる場合若くは蛾の飛び居るのを見付けたる時は餘さず之を驅除し其跡を絶たねばならぬ特に害蟲の發生を見定むるには害蟲の營みたる巢の有無を取調ぶることが必要である

第十四 壁 錢 (第十八圖)

錢

壁錢は蜘蛛の一種であつて其體は著しく扁平にて暗褐を呈してをり前面には口具を出して居り脚は四對ありて何れも長い其節は矢張り平たい第一と第二の二對の脚は稍や短くして第三と第四の二對の脚は稍や長い此蜘蛛は屋内に棲み薄暗き所を選みて此所に平たい錢形

第十八圖 (原圖)  
甲 ひらたくも  
乙 其巢



の巢を營み晝は之に潜み夜は之より出でて屋内にをるあらゆる蟲類を捕へて之を食するものである此巢の徑は七分位にて眞っ白で極めて平たい此圓ひ錢形の巢の周りには同じく絲縷にて拵へたる三角形の網の如きものがある通例此網にて巢を壁や柱や板戸などに巢を附着して置く  
壁錢は晝は巢の中に匿れ居るが故に其姿を見ることが難いけれども夜は餌食を搜索せんが爲め巢を辭し出づるものであるから往々目に觸るゝ

ことがある壁錢の形ちは前にも話したるが如く體は極めて扁平であるから容易に壁や柱の隙目などを巧みに潜り抜け或は疊の合せ目にも容易に入込むものであるから之を捕ふことは可なり六ヶ敷い但し壁錢は屋内の諸蟲を捕へて食するものであるから害蟲を滅する効力は決して少くないと思ふ然らば是れは有益なるものとして蕃殖せしむるが肝要だ

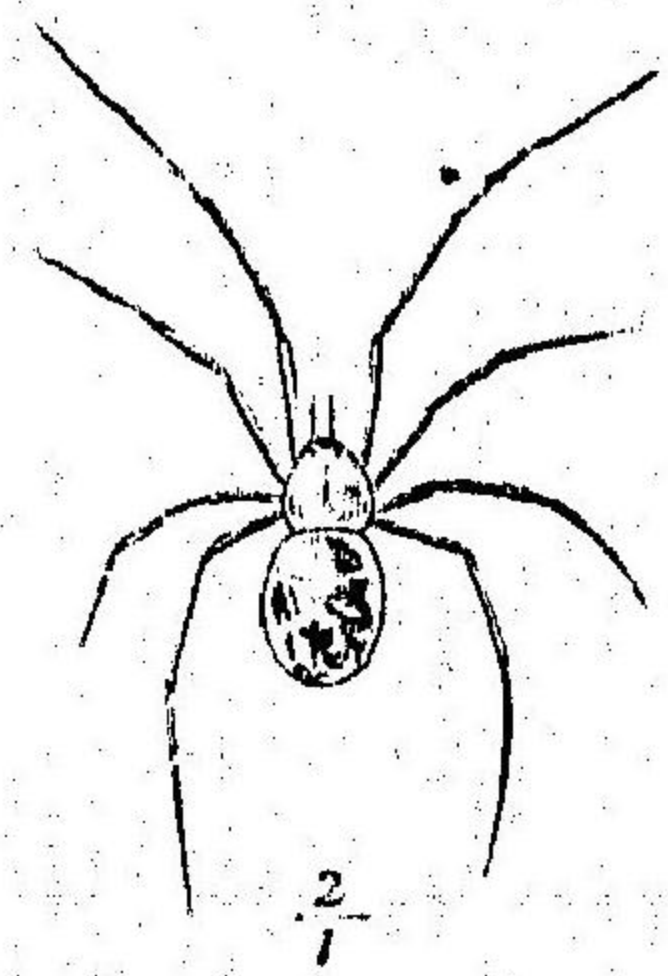
第十五 家蜘蛛 (第十九圖)

家蜘蛛は何れの家屋内にも多く棲んで居り部屋の隅だの天井の隅だの其他薄暗ひ所にて掃除をしてもはたきの當らざる所に巢を營み其中央に止りて獲物の巢に掛かるを

待つてをるものである此類の蜘蛛は鳥渡捕へても四五種位は容易に見ることが出来る委しく調べて見たならば中々少なくない種類があるに相違ない今や一種の家蜘蛛を

第十九圖 いへこも (原圖)

見るに體は頭胸部と腹部とに分たれ(頭胸部とは頭と胸とが合併して一部となりたるを云ふ是れは家蜘蛛のみならず野外に居る者も同様である且蟹蝦類の如きもの、體も家蜘蛛と同じ様に頭胸部と腹との二部に分れて居るが普通である着色は暗灰色で暗黒の斑紋が散在してある頭胸部の前面には其左右に三つづゝ小さな圓ひ眼があつて其左右には四本の長き脚を出して居るが腹には脚がない左れども腹の末端の裏には



數個の乳頭の如き者がありて之より繰出せる細き絲縷は皆集まりて一本の稍や丈夫なる絲筋となる此系筋にて巢を營むものである巢の形ちは色々ありて中には随分巧みに營めるものもあるが普通の家蜘蛛の營める巢は部屋の隅などに縦横に不齊に絲筋を張りて造れるものである此絲筋は軟かにして多少の粘着性があるから之に觸る蟲は直ちに之に粘着して飛ぶことができなくなる若しも巢に小蟲が粘着する時は巢を成してをる絲筋が多少震へるものである故に家蜘蛛は此震動をたよりて小蟲の粘着する所に到りて之を食とする、されども大形の蟲が巢にかゝる時は容易に巢を破つて逃ぐるることが常である又巢にかゝりたる蟲が大きくして力の強るものであるときは假令家



蜘蛛が一度は之に近寄るも其威勢に怖れて逃ぐるものである

家蜘蛛は皆巢に掛りたる蟲類を食して生活するものであるから屋内に於ける害蟲類を驅除することが少くない蚊や蠅なども家蜘蛛の爲めに食はるゝことが多い故に家蜘蛛は有益の動物と見做してよい左れば家蜘蛛の多く室内に蕃殖し所々方々に巢を張り詰めたらんには従つて害蟲の數が減するに相違ないけれども吾人は蜘蛛が巢を室内に張りたる時は兎角部屋が汚れるとか又は見苦いなどと云つて之を取去り或は煤掃には専ら蜘蛛の巢を取去ることを勤めてをる成る程蜘蛛の巢が部屋の内に張りたるものがあるときは著者も見苦いと思ふものから取去ること

屋 内 の 動 物

を望みては居るものゝ篤と考へて見る時は害蟲を除くの効能が實に多いことである

第十六 あとひざり(第二十圖)

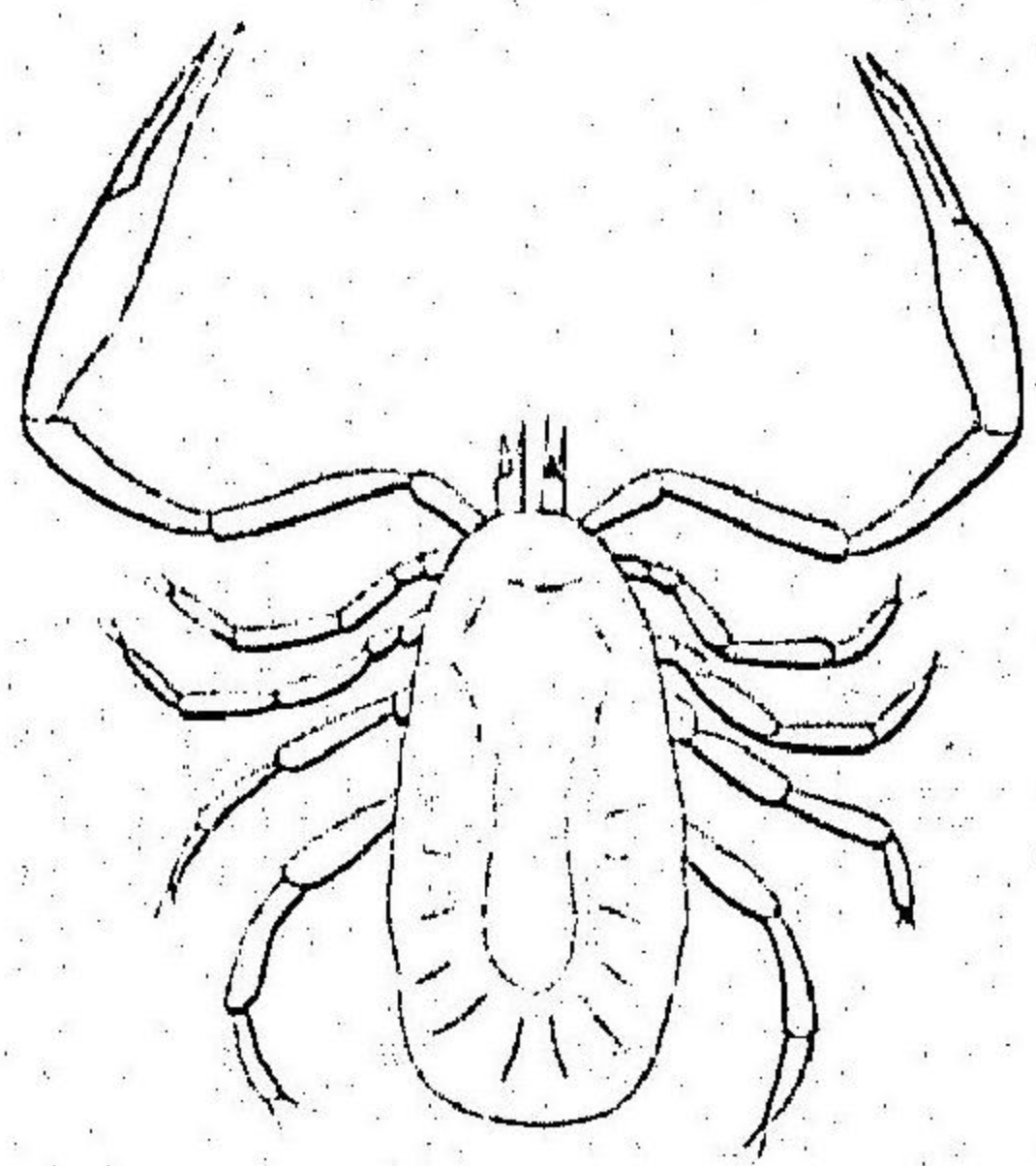
あとひざりは極めて小さな動物にて體は長くし平たい着色は淡灰黄にて體の前端には二對の鋏刀があつて其左右には四本づつ脚を生じてをる右二對の鋏刀には大小ありて大なる方は觸鬚と云ひ小なる方は顎觸肢と云ふのである脚は稍や長くして疾く側面に向つて歩き或は跡ひざりをなす特性がある依てあとひざりと名づけたものであらふ此動物は昆蟲ではなくて蜘蛛の中間であり屋の内外に棲める種類がある屋外に居るものは樹皮の下だの葉の間

あ と ひ ざ り

屋 内 の 動 物

などに棲んでをり屋内に居るものは本箱の隅だの反古箱  
其他種々の箱類・箆筒・長持等の中ちにも棲んで居り種々の  
小さな昆虫類を食とするものであるから有益動物の部類

第二十圖 あとひざり (原圖) に編入しても宜い



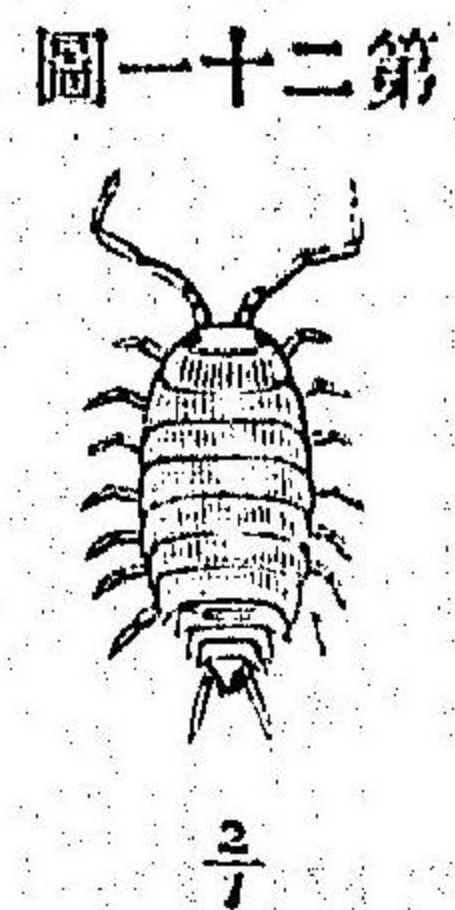
春夏の頃箱掃除をするとき其中ちに  
細かな木屑の如きものがあつて歩  
きて居るものを見ることがある是  
れが即ちあとひざりである見慣れ  
ぬ者は之を認むることは容易でな  
いけれども少しく注意するとき  
は體の前端に生じてをる鋏刀を見ることができ之れの見  
へるのはあとひざりと見做してよい

あとひざりの食するものは前にも云へる如き小さな昆虫  
類であるが尚ほ此外小さな壁蝨類をも好んで食するもの  
である

第十七 蟻 (第二十一圖)

蟻はをめむし又はわらしむしと云ひ蟻類の一種である  
が水中には生活せざるものにして陸に棲み重みに家屋の  
周圍縁下其他納屋物置温室等の土臺にて日光の當らぬ多  
少濕りたるところに棲み動植物の腐敗に罹りたる者を食  
とするも尚ほ種々の植物の根を食とすることがある  
此動物の形ちは殆ど長橢圓にて平扁ではあるが背面は少  
しく高まりて淡灰紫色を帯び腹面は灰白なり頭部には黒

色の眼と七節より成りたる長い鬚がある頭に次く七個の  
 軀節は大形にて幅が廣く多少の短毛を被り其各節には一  
 對の脚を具へてをる此七節は胸をなして居る之に接して  
 數節より成りたる小さな腹があつて腹端は尖り其左右に  
 きめむし (原圖) 一個づつ長き葉狀の附器を存して居る此  
 動物の脚は小形なるも丈夫にて能く走り  
 濕りたる土臺に住めるものなるも春夏の  
 兩季に雨がふりて屋内が濕りたる時には屋内に這ひ入り  
 て驅け廻つてをる別に吾人には害はなさぬものなるも之  
 を見る時は餘り心持のよいものではない之を追へば忽ち  
 脚を縮めて死したるまねをなすも暫くすると直に驅け出  
 し逃ぐるものである疊の濕りたると思ふ時には之を天日



第十二圖 動物の脚は小形なるも丈夫にて能く走り  
 濕りたる土臺に住めるものなるも春夏の

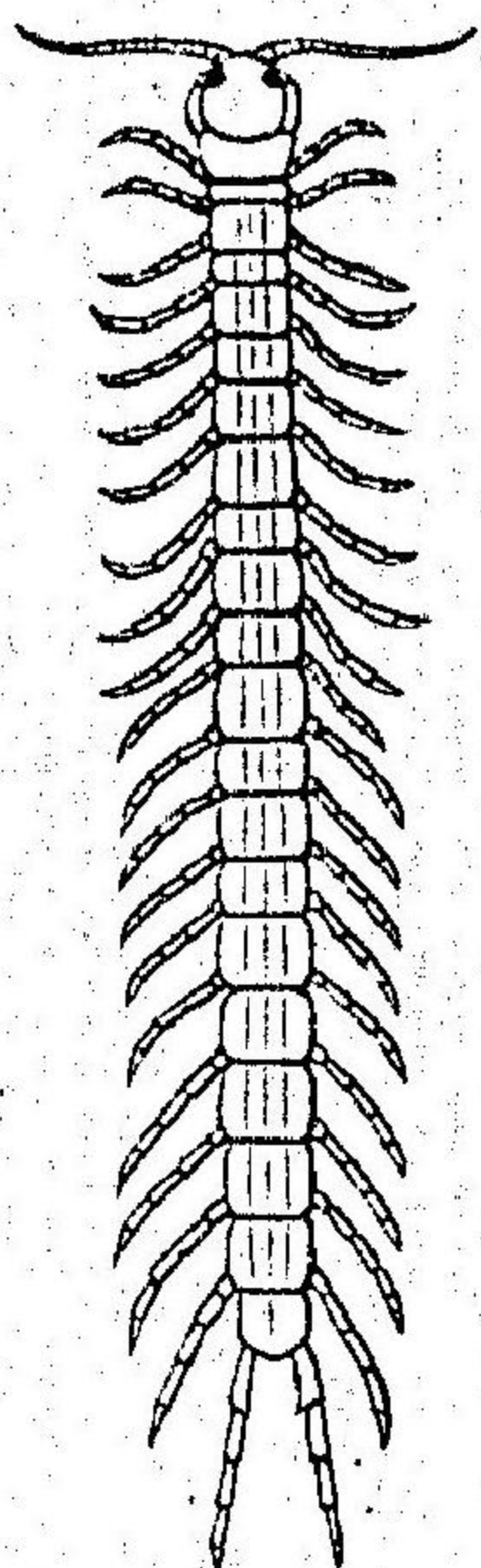
に晒し乾かすならばをめむしは決して屋内に往來するこ  
 とはない

第十八 蟻 (第二十二圖)

蟻は扁長の動物にして大なるものは長ケが三寸四五分  
 もある頭は殆ど圓形にして之と第一の軀節は黃褐で其他  
 の軀節の背面は暗濃綠であるが腹面は灰褐である  
 頭の前面には觸鬚と眼がありて其裏には口が開ひてある

第二十二圖 蟻 (原圖)

觸鬚は長くて平たく其尖  
 に向ひ次第に細くなつて  
 ある眼は所謂單眼と稱す  
 るものにて小球狀をなし



第十八 蟻 (原圖)

屋内の動物

て黒く頭部の左右に四個づつある頭の裏には口具の外に  
 顯肢又顯脚と云ふと云へるものがある是れは第一軀節に  
 屬する脚の變形したる者に外ならず此構造は極めて丈夫  
 にて其尖には爪を生じ且毒腺に通せるが故に若しも此顯  
 肢にて諸動物を螫す時は毒は忽ち腸口に入り劇く疼痛を  
 感せしむるものである  
 胴部は二十二の軀節より成り其形には殆ど方形のもの或  
 は長ケ短く幅廣きものがあつて毎節には一對の脚を具へ  
 てをる第二の軀節は腹面に於ては判然見ることが出來て  
 一對の脚を具へてをるも背面に於ては其發育不完全にし  
 て見ることができない脚は都合二十一對ありて毎脚五節  
 よりなり其尖には小爪を具へ第一及び第二對の脚は他に

蟻

比すれば稍や短小にして第二十一の脚即ち最後の軀節に  
 存する脚は稍や長大である

蟻は重もに晝は匿れ夜間出でて餌食を捜すものである  
 其舉動は甚だ活潑にして常に走行し往々屋内に棲みて諸  
 蟲類を例の顯脚にて捕へ之を螫し殺して食し吾人に對し  
 ては別に蟲害を加ふることはない然し誤て蟻に觸る、  
 時は之に螫れ傷口が甚しく痛むものである故に蟻に出  
 會ひたる時は之に觸れたり摘んだりすることは宜くない  
 右の如く蟻が屋内を馳け廻つてをるのは吾人に患害を  
 及ぼそふと云ふ考へではなくて諸蟲類を捕食する爲めで  
 ある通常蟻は人に嫌はるゝものなれども篤と考へて見  
 れば屋内に於ける害蟲類を捕食することが多いから有益

蟻

動物の一種と見做しても宜かろふ

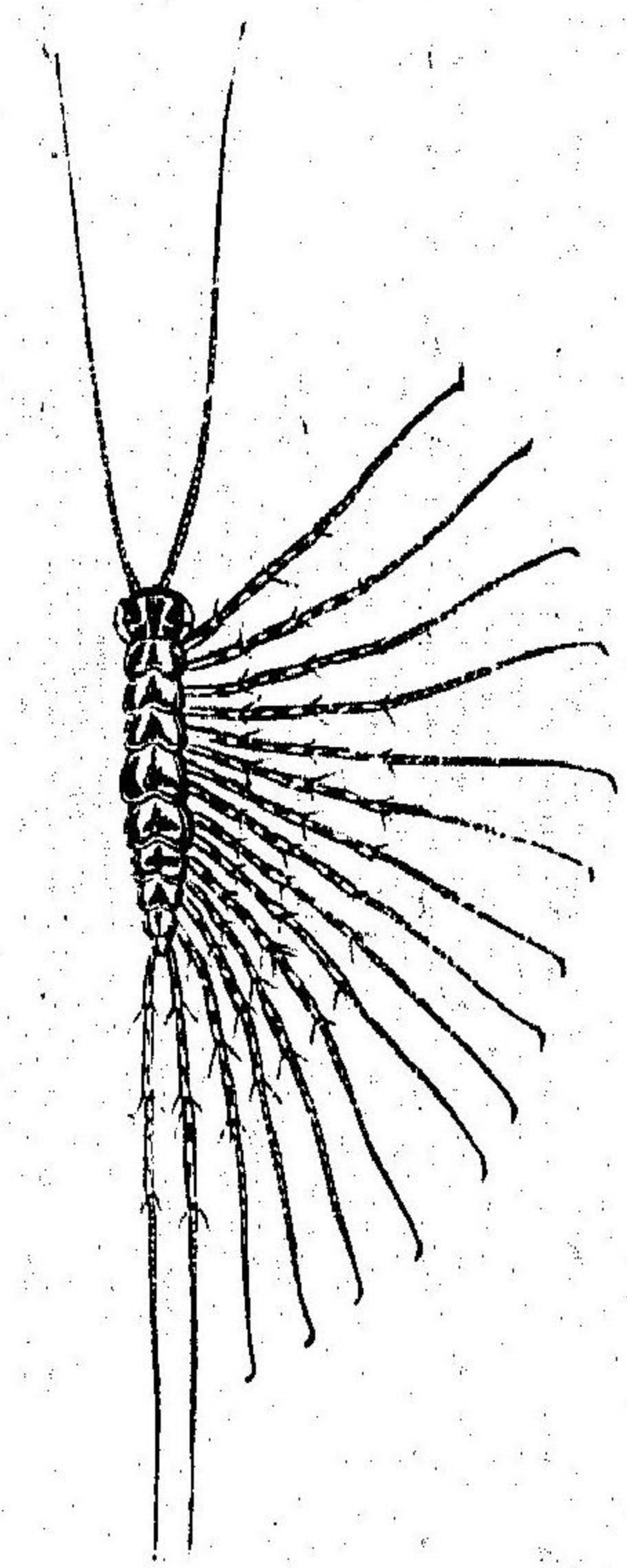
屋 内 の 動 物

第十九 蝨 (第二十三圖)

蝨は重もに屋内に棲み晝は匿れ夜は出で戸障子壁などを走るものである其長々は八九分ありて扁長であり頭は大形であるも尾端は稍や尖りてある頭も胴部も共に暗黄緑にて黒斑を存してをる頭部には二個の眼と二本の觸鬚と一對の腮肢とがあつて觸鬚の如きは著しく細長にして鞭状をなして居り且つ數多の小環節より成つてをる胴部は前にも云へる通り暗黄緑ではあるが其背面の中央と左右に黒斑を存してをり且つ胴部の背面には九個の長方形の硬板がならんでをる是れは各環節の背部をなして

蝨

をり各硬板の後縁の下には尙ほ小形の環節が横つてをる故に各硬板は二個の環節の位置を占めてをるものであるから各硬板の左右よりは二本づつ脚を出してをる脚は十五對ありて何れも細長くして尖りてあり其末端には一爪を具へてをるも第十五對自の脚には爪がない脚は數節よりなりて其着色は體軀と同様であつて黒斑を點々存し恰も手網染の如くに見ゆるものである



第十九 蝨

脚節のつがい目には二三の細刺を存し脚の末端をなせる一節は極めて長

して夥多の輪紋を存してをる第十五對の脚は他の脚よりは一層長くして後方に向て伸出し丁度頭部に於ける觸鬚と同じ者の様に見ゆるものである

蜘蛛は常に夜間に徘徊するものにて戸障子壁などをはつてをる其這ふのは徐行ではなくて常に走行してをり屋内に棲息する昆蟲を捕へ食するものであるから矢張有益の動物に相違ない其走行するところを見る時は體を少く起し上げ細長き脚を烈しく揺かすものであるから恰も脚の多くある蜘蛛が這つてあるものと見へ鳥渡之に觸るゝと直に脚がく體に付いてあるものと見へ鳥渡之に觸るゝと直に脚が取れるが脚の數は多いから一二本の脚が取れたと云つて別に走るに差支がないものと見へてどんぐり走つて行く

ものである入には別に患害を加ふると云ふ様なことはいければ其外貌は見惡ひものであるから之を見る時は餘り心地よいものではない然し此げじげじは屋内に棲める害蟲類を嗜食するものであるが屋内に居りては殺さないが宜い蜈蚣ならば之にさわると腮鬚にて整す患ひがあるけれども蜘蛛は左様な惡ひことはしないものだ

第二十 守宮(第二十四圖)

守宮は蜥蜴に似て扁長であり長き尾を持つて居り頭は特に扁平で眼は左右兩縁に接して横はる皮膚には顆状の小粒を密布せるが如くに見へ且小鱗を具へたるが故に皮膚は平滑でなくてざら／＼してある體軀の背面は暗灰紫を

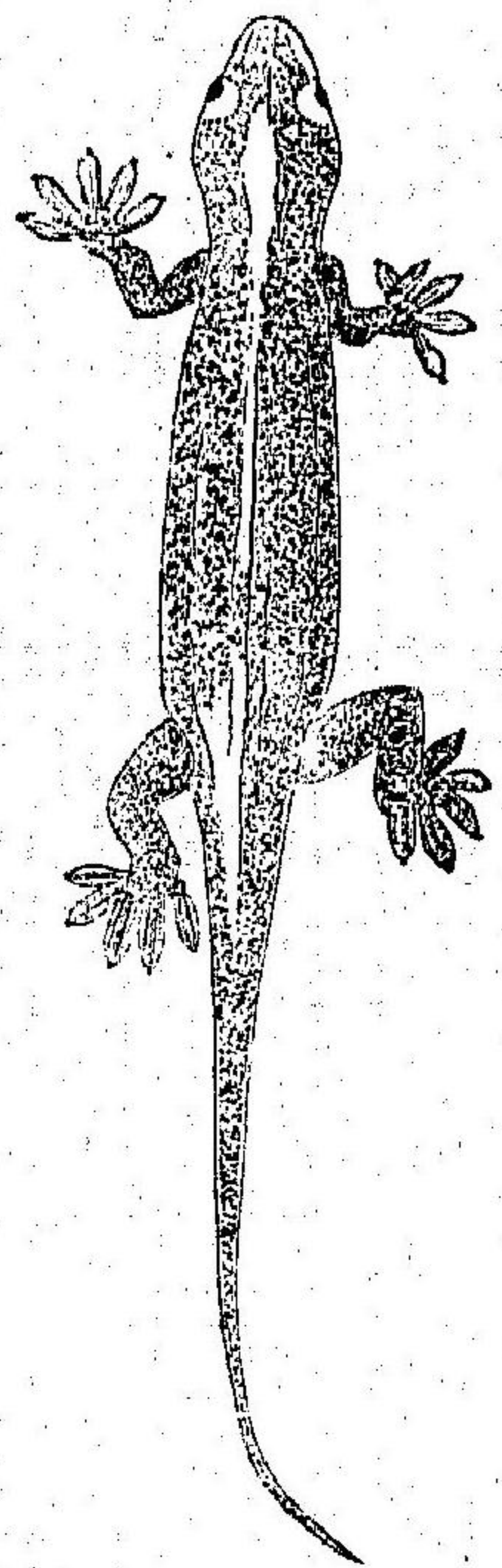
帯び腹面は淡黄を帯びてをる四肢は稍や大にして前肢は後肢より小形である前後の肢は何れも五本づつ趾を具へ居り趾は著く扁平にて殆ど紡錘形を爲してをり其裏は能く物に膠着するに足り且趾端には小爪を具へて居る尾は長くて其尖に向て次第に細くなつてをる

右に云へるが如く**守宮**は扁長であるから壁の破れ目・戸障子などの隙目・割目等に自由自在に這へ入ることができる

第二十四圖

やもり

(原圖)



肢は疾く走行するこ  
とに協つて居り且つ  
趾の裏の構成は平面  
に接着するに協つて  
居るものであるゆへ

守

宮

壁に這へ登り天井などは背面を下にし巧みに肢にて疾行するに堪ゆる尾は細長くして之に觸るゝものある時は容易に尾は切れ離るゝものである

**守宮**は夜間に現出する動物にして晝は容易に見ることはできない故に夜間は屋内の壁上を縦横に這い廻り夜は壁や戸に静息してをる昆虫類を捕へて食するものであるから是れも有益動物の一種となして宜い其壁上を歩いてをる中ちは時々停まりて頭を左右に揺して其食に協へる昆虫類を捜すものである其食となせる者は蠅・蛾の類其他室内に棲みてをる綜ての昆虫類である

今や**守宮**の外貌を見る時は鳥渡心地悪い様に見ゆるも別に吾人には何等の害もなさないことは極めてをるから**守宮**

## 屋内の動物

を見たとて、驚くも驚くに及ばない。尚ほ守宮は重もに屋内に居て室内にをる害蟲其他昆蟲類を嗜食するものであるから有益なる動物たるは更に疑ひのないことである。だからして守宮は可成保護して蕃殖するやふにしなければならぬ。守宮は卵生であつて人の餘り往來せざる戸の裏だの或は土藏の隅だの窓の隅などに入込みて此所に卵を産むものである。卵子は暫くにして孵化し小さな四肢と一尾のある子が産れて出づるものだ。然しかへりたての子は初めは一所に集つてをるも段々成長する時は皆分散して夫々餌食を搜索するため頻りに壁上を馳けあるきて昆蟲類を捕へて食するものである。部屋や土藏などの煤掃ひをなす時などには守宮が數疋の子と共に出でて逃げ匿くる

## 守

ゝものである。是れ等を殺したり潰殺したりするは取りも直さず有益の動物を殺滅することになる。故に守宮を見出したる場合には決して之を殺してはいかない。可成其棲息してをる所は觸れないやふにして可成逃走せしめざることに勤め、幼子の成育を援け、此有益動物の増殖を圖ることが最も肝要である。

## 宮

守宮の體の色は鼠色勝ちであるから黄昏などに出る時は容易に其形を認むることが六ヶしい。又た夜間などでは燈火を點しても矢張確と認むることが六ヶしい。つまり體の色が鼠色であつて夜に入つて出で來ると云ふは守宮が自身を保護し守宮の敵となれる者の侵患を免かるゝ上に於ては非常なる利益があるのだ。故に守宮の着色は所謂保護



屋 内 の 動 物

色と云つて宜しい之に類せる着色は他に幾らもある家鼠も守宮と同様に夜に出づる者と云ふことが誰れでも知つて居る其着色は矢張鼠色で夜間に出でたる時は中々見付けることが難い又た昆虫類の中ちにも重もに夜間に飛翔する蛾の如きは多くは鼠色勝ちであつて敵の眼に觸れ難いやふになつてをる右等の着色を帯びてをる動物類は晝間は如何致して居るかと云はば大抵暗ひところ薄暗ひ所に匿れて居て明るい所には出でこないが常である

守宮は常に驅けることが持前の性質である若しも之を見付けたる時には直様逃げてしまひ捕へることが六ヶ敷い加之壁や戸の極めて狭い隙間などがあれば巧みに之に逃入るものであるから取逃すことが常である若しも守宮の

家

尾に觸るゝものある時は尾は容易に切れ離れ其切れ離れたる尾は暫くの間は左右にぺんくはねてをる丁度庭園に居る蜥蜴の尾と同じ様なものだ普通日本の家屋内に棲める守宮は別に吾人に患害を加ふることなくして害蟲類を捕食するゆへ有益の動物と見做して宜いが外國に居る守宮の類には往々患害を加ふるものもある様子だ

第二十一 家鼠

鼠

家鼠は誰しも熟知して居る通り夜間のみ出で來る動物にて穀類を初めとして吾人の食用に供する者は大抵食するものである若しも鼠の嗜める食品が戸棚の中ちに仕舞つてをきたり或は箱の中ちに入れて置く場合には巧みに

戸棚の戸や箱の蓋を齧りて孔を開きて其中ちに入込むことが常である又た壁に孔を穿ちたり戸障子に孔を穿ちたり或は土藏の入口の戸などにも孔を喰ひ開き其内に入込みて患害を加ふることが甚しいものである家鼠の前歯は丁度兎の前歯と同じ者にて鑿の形をなし其尖きは鋭くなつてをる此歯の前面は所謂珫瑯質と云へる極めて堅き物にて被はれてをるも内面は珫瑯質にて覆れて居らない依て物を齧る時は前歯の前面の珫瑯質にて被はれ堅くなつて居るところは減らないが其内面の珫瑯質にて被はれて居らないところは著しく減つてゆくのが常であるから自然に鑿の刃の様に成るのである

耳は大形にて廣く幽微なる音聲にても能く聞き分くるこ

とができ眼は黒く圓大にて晝は能く見へないやふであるけれども夜は何でも能く見ゆるものであるから晝の間は寝て居て夜になると稼ぎ初むるものである此眼は容易に脱出するやふに成つてをるものと見へて若しも家鼠の頭を強く打つと眼は容易に飛出づることは罕でない體の色は所謂鼠色であるから暗いところに居る時は勿論薄暗い所に居つても容易に認め難い脚を見ると前脚は短くして後脚が長い常に走けるものにて徐行することはない又た場合に依ては巧みに跳行し又食する時は後脚のみにて斜めに立ち前脚にて食物を口に接して噛り食ふものである其食する有様を見やふと思ふ時は極めて静かなる納戸などに餅の一片其外何なりとも家鼠の食ひさうな物を置き

## 屋 内 の 動 物

障子に小さな孔を開き之より納戸の内を覗き居らば家鼠の食する有様を熟視することができ之を覗ふのは閑散な時には中々面白ひことである家鼠の尾は長くて其面には密に輪紋が存しあつてまばらに毛がないてある若し家鼠が逃出そうとする時に其尾を強く摘む時は尾の皮は容易く剝れ取れることがある家鼠の蕃殖は甚きものにて大抵一ケ年中に三四回も子を産むものであつて毎回産むところの子の数は五疋乃至十疋位である

昔しは家鼠は只た屋内に棲みて食品を食荒すのみであつたが近頃は黒死病の媒介者となつてをることが分つたから家鼠の患害が一層恐ろしくなつてきた尙ほ家鼠に就きては恐るべきことがある夫は外ではない家鼠に手足を咬

## 家

## 鼠

まゝ、時は其傷口に一種の毒質が入り込み後ち發熱して止むことなく遂に死することがある此毒質を俗に鼠毒と云つてをるけれども未だ其毒質の成分も分らないから之を治する方法も分つて居らない故に鼠毒に罹つたる時は先づ百年目とあきらめるより外はないのであらふ

家鼠を驅除する方法は幾通りもあるが一番簡便なるのは猫に驅除させることである然し猫を飼ふことの出来ない者は他の方法にて驅除しなければならぬ即部屋の内に入込み筆筒戸棚などの裏に這れてをる時は之を追出して鞭などにて打ち殺してもよいが兎角仕損じが多いから疊をとしの法に據り押し潰すが遙に効能がある此疊をとしと云ふ方法は何も六ヶ敷いことではない只疊の一

隅を起し上げて四五寸許の杉箸を疊裏と牀板との間に立て起したる疊の支柱となし置き夫より家鼠を其隠所より逐出さば直ぐに起したる疊の下に逃げ入るものである其逃入りたる時は直ちに起したる疊を履み付けなば例の杉箸は容易に折れ挫けて疊は直に元の如く牀板に接し家鼠は牀板と疊との間に壓潰されて死するものである  
又一法には臺所などにて毎夜家鼠が出で来りて臺所あらしをする場合には豫め家鼠の通路を認め置きやがて家鼠が臺所に出でたる音を聞かば洋燈ちんぽうの火光を強めたるものを携へ右家鼠の通路に走り行き左手に洋燈を持ち右手に鞭の類を持ち待たば家鼠は洋燈の光りに目は眩み人が側に立ち居るのに氣付かずして例の通路を傳はり逃げんと

するものが多い家鼠を打殺するに適當なる位置に走り來たる時は右手に持ちたる鞭にて家鼠の頭より一二寸許も前への所を強く打たば丁度其頭は鞭の爲めに碎け眼は飛出し容易に撲殺することが出来る此方法を少しく練習する時は面白ひほど家鼠を打殺すことができる次ぎは枡をとしの法である此法は從來使用し來れるものであるが近頃は餘り使用する人はないやふに考へらるゝところが之を使用するときには中々家鼠を捕ふることが出来る此法は先づ室蓋を撮り其一隅に口を室蓋の内側に向けたる一升枡を起し置き枡の内に餌を入れ置くのである左すれば家鼠は餌を食せんとて枡の口に手を掛くれば其重みにて枡は轉墜して室蓋の中かに落ち伏して家鼠は枡の内に入り

## 屋 内 の 動 物

て生取りとなる近來は鼠捕りと稱へ鐵製の針金にて拵へたる鳥籠様の金籠があつて何れの地にても金物屋が賣てをる此籠も家鼠を捕ふるに便利であるが若し一たび家鼠を捕へて殺したる後は此籠を丁寧に洗ひて籠に着きたる家鼠の香を取除かねばならぬ然らざれば家鼠は再び籠の内に這い入ることが少ない

右の外家鼠を殺すに種々の藥品を使用することがあるが是等は大抵有毒なるものが多いから之を使用する時には餘程氣を付けねばならぬ即砒素若くは燐素などをしん粉に混入し之を丸めて團子となし家鼠の往來する所に轉がし置かば之を食して斃ほるゝものが多い然し前にも陳べたる通り砒素も燐素も劇毒であるから右の毒團子の如き

## 家

## 鼠

は食品を置ける所には配置せぬが宜い又毒團子を餌とし家鼠を驅除する場合には中毒したる家鼠は兎角水を飲みに來るものなれば水瓶には確と蓋をなし之に入込まないやうにしなければならぬ尙ほ井戸にも家鼠が落入らぬやふ蓋をすることが肝要である尤も有毒の餌を食して斃れたる者があらば後ちには之を食はぬやふになるが有毒の餌のみを毎夜家鼠の往來する所に配置することは宜くない時々無毒の者をも配置せねば驅鼠の効能がうすい又一法には多く家鼠の往來する所の方三尺深さ四尺位の孔を掘り穿ち其内側に極めて滑かなる石の板を張り孔の底には何なりとも家鼠の嗜み食する品を入れ置かば家鼠は多く之に落入り再び逃げ出づることができなから容易に

捕殺することができる  
 兎角家鼠は屋内の有害動物であつて更に益のないものだ  
 只だ食品を貧食したり家具を齧るくらいはまだ我慢もで  
 きるが黒死病の媒介者とまでになるに至ては實に恐るべ  
 き屋内の有害動物たるに相違ない依て之を驅除するに最  
 も便利なる方法に就きて爾來ますます研究せねばならな  
 いと思ふのである

### 屋 内 の 動 物 終

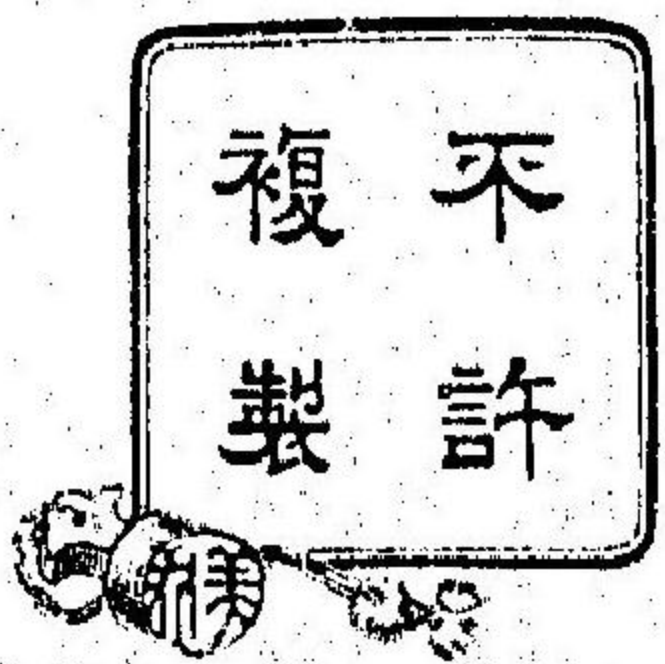
(屋内の動物)

明治三十八年十一月十二日印刷  
 明治三十八年十一月十五日發行

著 者 佐々木忠次郎  
東京市赤坂區青山南町六丁目百廿番地

印 發 行 者 兼 河 出 靜 一 郎  
東京市日本橋區通三丁目十番地

印 刷 所 會 社 東 京 國 文 社  
東京市京橋區宗十郎町十五番地



發 行 所

東京市日本橋區通三丁目  
 (電話 本局二七七七番)

成 美 堂 書 店

各府縣大販賣所

松江市	高津山町	岡山市	岡山市	岡山市	岡山市	宇治町	今治町	大洲町	松山市	高知市	高知市	徳島市	新徳島市	和歌山市	龍野町	龍野町	龍野町	龍野町	龍野町
根	山	川	媛	知	島	歌	山												
川縣	鹿嶋縣	武田縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣	鹿嶋縣
井科田邊	朝照金宗	太文正次	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎	太郎
助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助	助

各府縣大販賣所

橫須賀町	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
神奈川																			
川屋沼	見合田	上林	田	事	村	原	屋	書	內										
新集	興文	石勘	茂	庄	試成	旭	山	喜	報										
助	助	助	助	助	助	助	助	助	助										

成美堂發行  
圖書特約  
大販賣所

岐阜市 小能町  
大坂市東區備後町  
同心齋橋筋南一丁目  
同東區備後町四丁目  
名古屋市本町三丁目

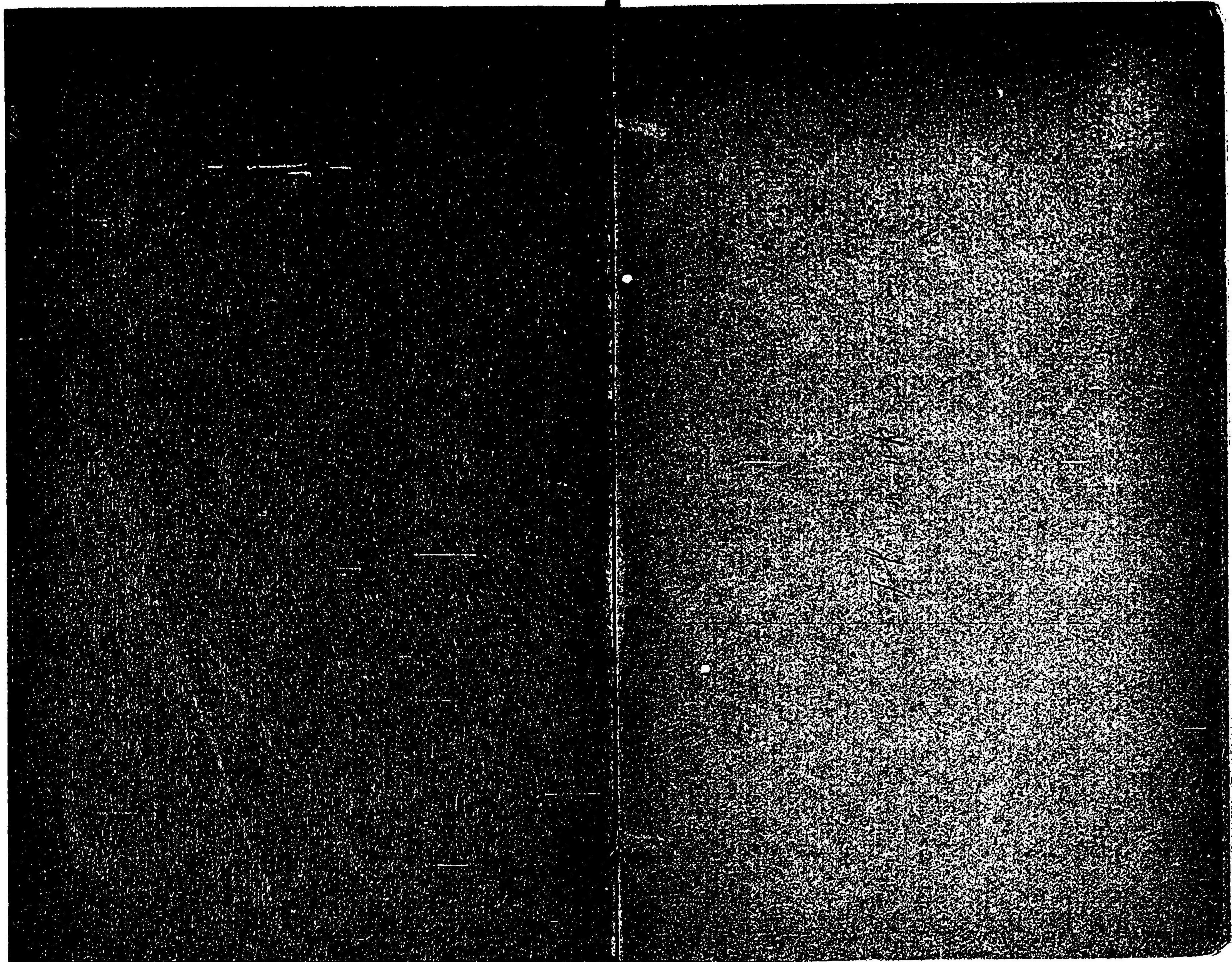
金寶文集成  
華文海成美  
堂館堂堂堂

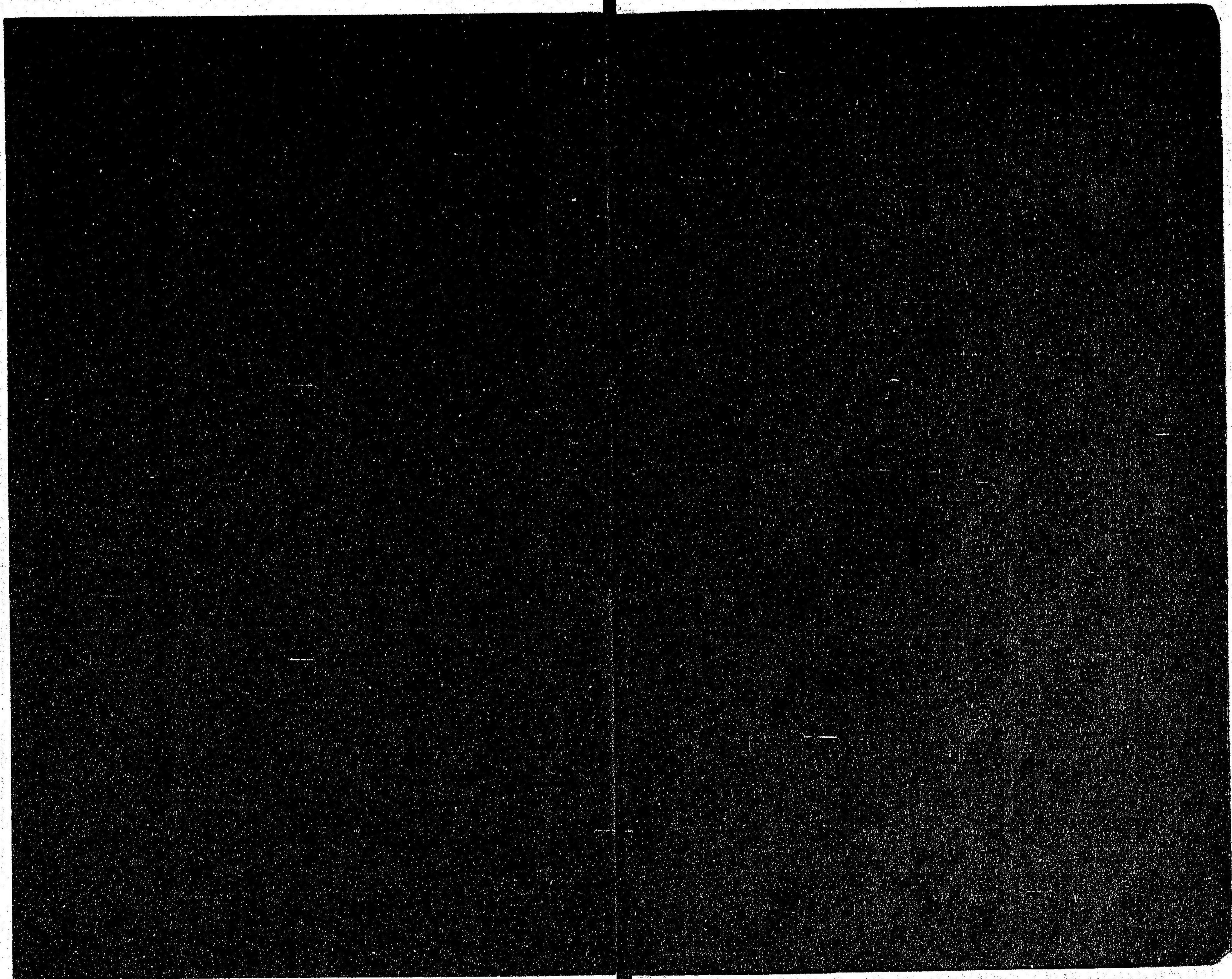
川吉松石三  
瀨岡村井浦  
代平兵三源  
助助衛郎助



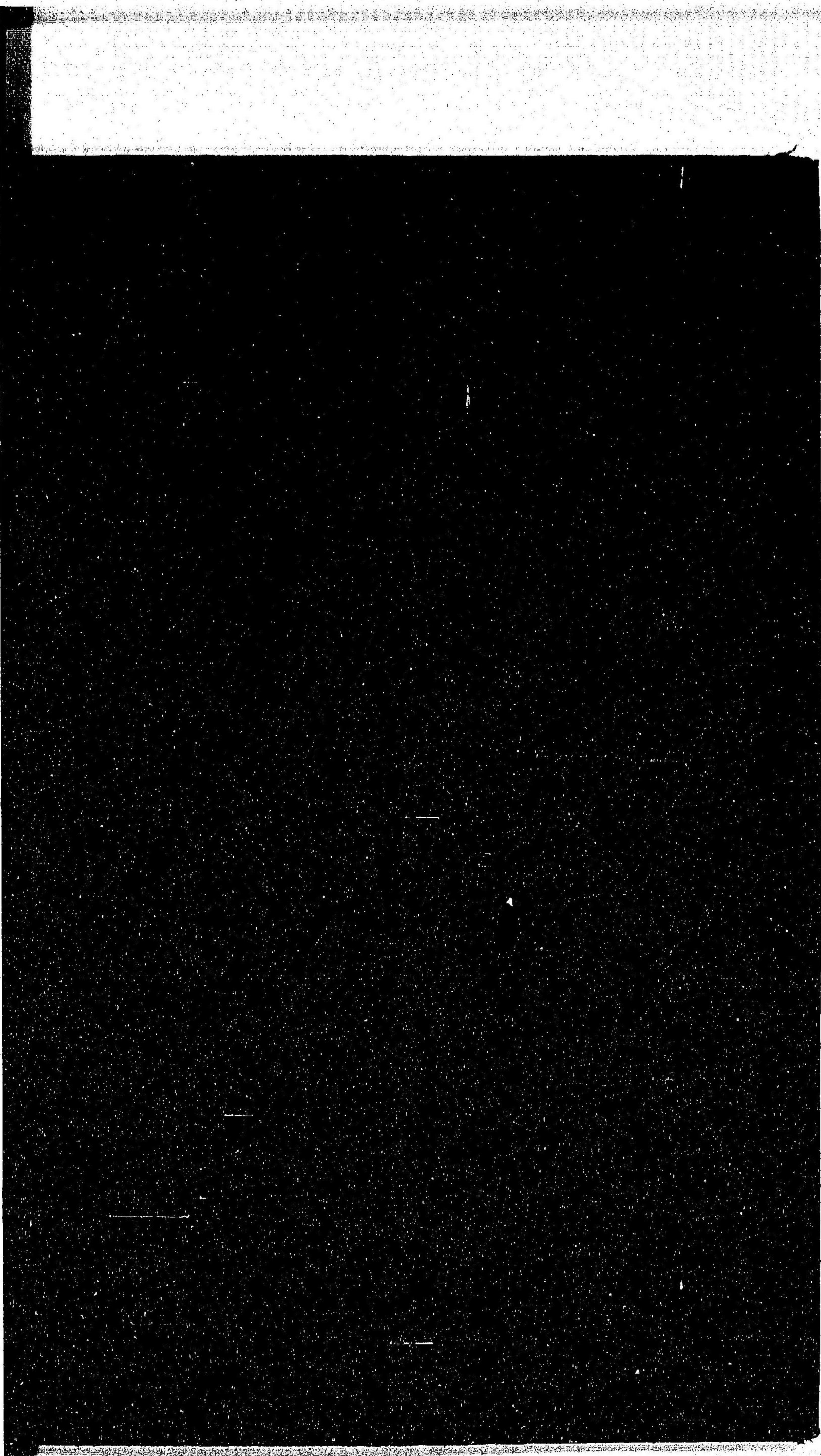


79  
631





79  
637



79  
631

057443-000-5

79-631

屋内の動物

佐久木 忠次郎 / 著

M38

CAR-0013

